作・はなださとし

第一章：交雑機関／Chapter 1: hybridazation engine

Sept./2009

天狼新星

Sírius: hyper nova

第一章　交雑機関

Chapter 1: Hybridization engine

［修復版 -restored versin 1.1- ］

や　が　て　世　界　は　焼　き　尽　く　さ　れ　る　・　・　・

主な登場人物

Soliton Optical Communications Japan (SOCOM　　-Japan)の契約社員たち

SOCOM-Japanは光ソリトン通信の基盤開発、通信サービスの提供を行っている合弁会社。Soliton Optical Communications（SOCOM社: SOCOM-CA[California]、または単に「カリフォルニア」と同社の者は呼ぶ。Headquarterはカリフォルニア州Los Angeles、研究センターは同州のSan Diegoにある）の日本ブランチという言い方が正しい。所在地は千葉市美浜区である。

・大河内　未紀（おおこうち・みき）

Solitary Packet問題対策チームのチームリーダー。大手情報関連会社からヘッドハンティングにより入社。優秀。でも、優秀であるが上に・・・って感じか？

・岡　昌生（おか・まさお）

大河内により対策チームに雇用された期限付き非常勤社員。ここに来る前は、弱小コンピュータ関連会社でSEをしていたらしいが、実は某有名大学大学院中退という学歴を持つ。大学院時代は量子コンピュータの研究をしていたって言うんだからすごい。

・多川　彩（たがわ・あや）

大河内により対策チームに雇用された期限付き非常勤社員。「クラッキングの女王様」っていうか、すげーハッカー。「つっけんどん」な性格のお方だが、よく見ると器量好しだったりもする。だから何だってこともないけど・・・

・澤山　慎二（さわやま・しんじ）

同じく大河内により対策チームに雇用された期限付き非常勤社員。ぬるい「オタク」といったところか。

・吉谷　紗英（よしたに・さえ）

対策チームの「良心」と呼ばれることもある、できたお方。口数は少ないが、極めるべきところは、びしっと極めちゃいますから！

・松田　由美子（まつだ・ゆみこ）

対策チーム全体の秘書兼雑用係。ええ感じの「和ませ系」キャラ。マジで頭のネジが飛んでいるのかも・・・

電脳世界の住人達

・少女１／少女２［双子］

世界の終末を引き起こす「Faint voice（か細き声）」。量子コンピュータに繋がれた最終兵器？　幻影として岡の前にも度々現れるという・・・

・Hermit［隠者］／深尾大尉

Soliton Optical Netの中の隠者。でもホントはCyber Force（後述）の指揮官なの・・・　いや、「だったの」か？

Cyber Force 2057 (C F 2057)

Cyber War電脳戦のために組織されたコマンド部隊

・林一等通信兵（ｄＢ・通信兵）

Cyber Force 2057の「ｄＢ」、すなわち「ダイレクト・バインダー」である。電脳部隊の保護や通信を担当する重要な役割を担っている。

・片桐伍長

この隊の伍長。どうやら新参者らしい。ところで、「伍長」を表す英語のCorporalって名称、「伍長」だけでなく「聖餐衣」を表すって知ってた？　いいえ、私は知りませんでした。

・久保曹長

消えた深尾大尉の代わりにリーダーに抜擢されるが、優しく実直な性格のため、とんでもないことに・・・

・奥山二等兵

すべての情報を破壊出来る「破壊コード」をロードしたインタラプタと呼ばれる武器を携帯する。

Cyber Force 2057 (C F 2049)

破壊命令を受け、最初にFaint voiceに電脳戦を仕掛けた電脳コマンド部隊。通称、レッドベレー。

・桐生大尉：Cyber Force 2057　の指揮官。2050年、Faint voiceへの電脳戦で戦死。

・小田二等兵：Cyber Force 2057　の戦闘員。同じく、Faint voiceへの電脳戦で戦死。

Cyber-Force（サイバー・フォース）
［現代用語の基礎知識２０５０年度版］

サイバーテロリズムに対するカウンターアタックのために組織された特殊部隊（「特殊電脳部隊」）。個々の構成員はCyber-Soldier（Cy-Sol、サイ・ソル）または「電脳兵」と呼ばれる。

二十一世紀の中葉、世界情勢は依然としてアメリカを中心としたグローバリニズムとそれに反抗する多数の勢力により、多極分化の様相を呈していた。それは、民族の、経済の、そして宗教の対立の上に生じた「ひとつの平衡状態」と断言できるかもしれないが、幸福な状況であるとは言い難かった。とにかく世界中、至る所で小競り合いが起きているのは事実だったからだ。二十世紀の終わりには一部の楽観主義者の間で「世界をひとつにするもの」と歓迎されていた「Internet」も、未だグローバルに配線された光ソリトンケーブルという形で存在していた。しかし、そのネット自体が国家単位や経済圏単位でRegional Fire Wall(RFW)という障壁で寸断されており、World Wide Webなどという観念はもはや過去のものであった。この情報網の断絶も、ここ数十年繰り返されてきた「サイバーテロリズム」または「サイバー・ウォー」の悲劇的状況から考えれば当然の帰結であろう。

ある「テログループ」が国際政治犯の釈放を求め、大国のFire Wallを易々と越え、情報ネットワークを攪乱、ライフラインや交通・医療サービスを含む都市機能を完全に麻痺させた上、原子力発電所の制御を支配下においた。警察機関・軍事関連施設のコンピュータネットワークも同様の攪乱を受け、何の対応もとれぬまま、事態は最悪の結果に向かって突き進むことになる。その時点で、「混乱の拡大」がテロリストにとっての行動原理となっていた。国際政治犯の釈放などどうでもよくなっていたのだ。政府は国内ネットワークの、一部物理的な破壊を伴う、完全停止を決断。それ以上の混乱は避けられることとなったが、遅きに失した判断であった。すでにコントロールを失った原発のリアクタは暴走状態に陥っており、コアメルトダウンを起こし、爆発を繰り返しながら、玄武岩層を融かし岩盤の中へと沈みこみはじめていた。電気も水道も情報の供給もない中、鎮火活動はおろか、住民の避難誘導もままならなかった。政府や州当局にできたのはただ祈ることだけだった。上昇気流により生成された雷雲による大量降雨にも助けられ、幸運なことにメルトダウンは１週間を待たずして収束の気配が見えてきた。また、コンピュータネットワークの修復も迅速に行われた。だが、その間の被害は甚大であった。たくさんの者が死に、その十倍以上の者が重篤な放射線障害を負うこととなった・・・大国の反撃は苛烈を極めた。「サイバーテロ」を引き起こしたグループの母体とそれに荷担したとされる国家がすぐに炙り出され、そして文字通り完膚無きまで焼き払われた。

これを教訓としてすべての国々が情報ネットワーク上に国境を作り、その警備の強化に乗り出したが、サイバーテロ対策を行うサイバー部隊、サイバー・フォース、もこれに呼応する設置されたものである。

テログループが引き起こしたこの未曾有のサイバーテロが、たった７人のクラッカーによる犯行であったというのは、驚くべきことである。７人のクラッカーはカリブ海に浮かぶ小さな島から攻撃を仕掛けた。テロ発生から７２時間後に行われた特殊部隊の攻撃の際に、被疑者は全員死亡したと伝えられているが、事実はそれとは多少異なっている。特殊部隊の急襲の時点で７人のクラッカーはすでに死んでいたのだ。いや、正しくは死んだに等しい状況で横たわっていたのだ。このことは、ごく一部の者しか知らない事実というやつだが・・・　離島の上に小さなプロバイダー会社があった。掘っ立て小屋のような外観とは裏腹に、ハイスループットのサーバシステムに光ソリトンケーブル、そして自家発電装置が完備されていた。その掘っ立て小屋の一室でクラッカーたちは見つかった。「体感ゲーム」にでも使われているような生体-シリコンパッドを、耳の後ろとこめかみにペーストで貼り付けた状態で、全員ベッドに横たわっていたという。呼吸こそしていたが、も

う二度と目覚めることはないように思われた。実際、極秘に運ばれた軍の医療機関で、すべてのクラッカーたちは時をおかずして眠るように息を引き取った。診断した医師の一人は、クラッカーたちについてこんな風に語っている。「まるで魂を抜かれたようだった」と・・・

クラッカーたちはサイバーテロのためにウイルスやワームを使ったわけではない。サーバをダウンさせるために特殊なパケットを発信し続けたわけでもない。彼ら自身が、正しくは彼ら自身の意識が、ネットワークの中に入り込み、ウイルスとして機能したのだ。光ソリトンケーブルの中に自らを、その魂を、情報としてアップロードしたのだ。政府による全ネットワークの物理切断により、その意識は二度と持ち主の下に戻ることはなかったが・・・

このような意識のアップロードについては、技術的に可能であるという研究成果がすでに数多く出されていた。ショウジョウバエからサルに至るまで、様々な生き物の遺伝情報から意識レベルでのアップロード例が報告されている。遺伝情報・意識情報を含め生体を光ソリトン通信網に送り込むことを、solitonize（ソリトナイズ）―ソリトン化と呼ぶが、人間での実験は、実際危険が大きすぎるという理由から、一切行われてこなかった。果たして人の意識が高速転送に耐えられるのか？　重篤な精神障害を引き起こすのではないか？　その問いに答えられる者が一人もいなかったからだ。だが、彼らはそのラインをあっさりと越え、その上「ネットワーク攪乱」そして「原発のオペレーション・システムの支配」というミッションを完璧にこなしてしまったのだ。

すべての国が、極秘に軍事目的でのソリトナイズの研究を開始した。そして生まれたのがCyber-Soldier、いわゆるCy-Sol（サイ・ソル）である。資質があり、訓練を積んだ兵士であれば、ソリトナイズし、ネットワーク内で様々なミッションを十分に行うことが出来る。そして、これがサイバー・ウォー、電脳戦において最も有効な戦闘形態なのである。ソリトナイズしたサイバーテロリストの攻撃を撃退できるのは、同じくソリトナイズしたサイ・ソルだけだ。

ＯＯＯ　A Faint voice　［か細き声］

舞台上に黒い外套を羽織った一人の男。自らをHermit（隠者）と名乗っている者である。

Hermit　・・・Faint voice、か細き声。その少女はそう呼ばれていた。もしかしたら、彼女のことではなくそれを含む全体の機構を、そう称していたのかもしれない。全体の機構・・・それは、いわゆる「量子コンピュータ」だった。（鼻で笑い）量子コンピュータだって？確かに量子力学的アプローチは様々なコンピュータ技術に応用されてはいる。たとえば、暗号化や暗号解読、量子状態のスキャニング・シミュレーション。そのような技術はすべて、量子効果の恩恵に浴している。しかし、純粋な量子コンピュータが存在していようとは・・・　だが、確かにそれは交じり気のない「それ」だったのだと思う。そう、感じたのだ。　・・・Faint voice、か細き声。その少女はその中にいた。ひとつのピース（部品）として・・・

男の背後に、遠くを見つめている一人の少女の姿。視線の遙か先に、何か不思議なものでも見つけたように、小首をかしげる・・・

少女１　Faint voice、か細き声・・・　それが私の名前？
Hermit　いや。君には君自身の名前があるはずだ。
少女１　名前？
Hermit　そう。私が私自身を隠遁者、Hermitと呼ぶように・・・
少女１　名前・・・

悲しい顔で遠くを見つめる少女。

Hermit　・・・その量子コンピュータはうち捨てられた研究施設の中にあった。人っ子一人、猫の子一匹いない巨大な廃墟。この戦乱の世にあって、きっと何らかの事情で研究を放棄しなければならなくなったのだろう。だが、その中に君はいた。量子コンピューティング・システムに、隔離された「振幅装置」の中に半永久的に保存された情報として・・・　いや、君は人間だった。私と同じように・・・
少女１　Hermit？
Hermit　何だ？
少女１　もうすぐよ。もうすぐやってくる。
Hermit　君は何度となく、その言葉を繰り返す・・・
少女１　もう、こんなに待っているのだから。たった一人で・・・
Hermit　君は待っていた。待ち続けいた・・・

遠くを見つめるその両目から、大粒の涙がこぼれ落ちている。

Hermit　８．６光年離れた遙か彼方よりの来訪者を君は待っていた。太陽系の外からメッセージを携えてやってくる、その使者を。だが、そのメッセージの内容はすでに分かり切っている・・・

唐突に傍らに転がっていたヘルメットから警告音が発せられる。
漏れ聞こえる交信音声。

「ピッ。ICMPエコー確認。ポートスキャンを開始・・・」
「ICMPエラーは？」
「ピッ。ACK (acknoledge) 肯定応答確認。」

その声を聞き、脅え始める少女。

少女１　この人たちではない。待っていたのは、この人ではない・・・
Hermit　わかっている。大丈夫。心配はいらない。行こう・・・

男は、ヘルメットを拾い上げて、少女に近づく。そして、震える少女を外套の中に隠すように包み込み、足早に立ち去ろうとする。
その間も、ヘルメットから交信音声が漏れ続けている・・・
「バナーチェックは？」
「ピッ。調査終了。」
「プロトコル・コンバーター準備」
「ピッ。リモートログイン・・・」

恐れて、震え、やがて耐えきれず耳をふさぐ少女。
そして、暗転。

暗がり、女の話し声。
舞台中央に立っている一人の女。
照明の中で、徐々に明確になって・・・

大河内　・・・彼らは皆、箸の使い方が巧い。カルビーの「かっぱえびせん」や亀田製菓の柿の種、東日本食品のレーズンサンド、東鳩のキャラメルコーンも、上手に箸で摘み上げる。キャラメルコーンの中に混じっている薄皮の付いた、情けないほどの大きさの、あの発育不全のピーナツだって、器用に摘んで、口の中に放り込む。それもたて続けに、３粒たて続けに、電光石火の早業で、ぽん・ぽん・ぽんって感じで口の中に放り込むんだ。

舞台後方に一人の男（澤山）が座っている。眼前のラップトップコンピュータのLCDが明滅しながら発光し始め、男の顔を照らし出す。男の傍らには東鳩のキャラメルコーン。袋はパーティ・オープン（「パーティ開け」とも言う。みんなで食べられるように、開口部を大きくとった開き方のこと。って、本当にこんな言い方あるのか？）されている。立て続けに、キャラメルコーンを箸で口に放り込んでいる。

大河内　・・・タイマーで計ってみたことがある。しなびた黄色の芋虫みたいなキャラメルコーンの間に紛れ込んでる小さなピーナッツを見つけだし、摘み上げ、３粒口の中に放り込むのに４秒かからなかった。１粒あたり、１．３３秒を切る。まさに神業。ギネス級・・・っていうか、私がIOCの委員長だったら、速攻、次期オリンピックの正式競技に認定してる。

他方で、ほの暗いLCDの光に別の人影（多川）が浮かび上がる。手に箸を持ち、傍らのカルビーかっぱえびせん（パーティ・オープン：くどい！）を口に放り込むと、箸をえびせんの山に、仏前の飯よろしく、突き立てる。咀嚼音が響き渡る。無自覚に噛み砕かれるかっぱえびせん（ゴーヤ・チャンプル風味：２０１０年の日本、なぜか沖縄料理が大流行なんだって）。そして、狂ったような速度でのキータイプの音がそれに協奏する・・・　そして、さらに幾人かの姿（松田、吉谷）を、それぞれのLCDの青白い、あるいは時折赤や緑に明滅する光が、舞台上に浮かび上がらせる。

大河内　なぜ、箸なのか・・・

一人の男（澤山）が、キータイプしていた手を止め、答える。
「ほら、素手でつまむと、マウスとか、キーボードとか、べたべたに油っぽくなっちゃうでしょ・・・」
後方の女（多川）が答えを継ぐ。
「特に、キーボードがぬるぬるになったら始末に負えないし・・・」
誇張されたマウス・スウィッチのダブルクリック音。そして、また、狂ったようなキータイプ・・・

大河内　で、なぜ、スナック菓子？

響き渡っていたキータイプの音が不意に止む。コンピュータに向かっていた全員が、不思議そうな顔つきで正面を見据える。そして同時に肩をすくめる。
と、一人の女（松田）が、ぽつりと・・・
「好きだか、ら？（「好きだから。」と言い切りたかったのだが、「か」のあたりで自信がなくなり失速。そんでもって、「ら」は問いかけ口調に）」

吉谷　そうかも・・・
多川　コンピュータいじりながら、湿りモン食ったら、汁垂れちゃうだろ？
大河内　そうなのか？　そういうことなのか？
多川　だって、キーボードがニンニク醤油臭くなったら、やる気もなくなるだろ？
澤山　多川さんはキーボードが醤油臭くなるのと、ソース臭くなるの、どっちがイヤですか？
多川　澤山？　なんだそれ？
澤山　究極の選択。
吉谷　究極か？　それ・・・
松田　私はぬかみそかな。
澤山　ぬかみそ、選択肢に入ってないし・・・（なぜか泣きそう）
多川　あほか・・・

大河内　とにかく、彼らは日々必要とされるカロリーの大半を、いや、そのすべてを、宅配のピザとスナック菓子でまかなっている。スナック菓子もピザと同じく、ケータリング・サービスが持ってくる。90cm x 60cm x 60cmの段ボールが２箱・・・が毎日配達される。中にはスナック菓子、スナック菓子、いやと言うほどに詰め込まれてるスナック菓子・・・そして、１立方メートル分のスナック菓子は、さも当然のごとく、彼らの腹の中へ消えていく・・・

吉谷　そろそろ、来るんじゃない。もう３時だし・・・
松田　そうですね。さー、今週のびっくりどっきり菓子はなんでしょうね。
多川　うまか棒、ぬかみそ味じゃないか？
全員　（真顔で）やだなー、それ。

大河内　当然、奴らが巧みなのは、箸の使い方だけではない。彼らは皆、優秀なシステム・エンジニア、プログラマー、またはハッカーなんだ。つまり、ある目的のために集められたコンピュータ・ウイザード、電脳の魔術師達だ。ここSOCOM-Japan、Solitary Packet問題対策室に・・・

と、叩きつけるような音楽。舞台上に大きな映像が投影される。
浮かんでは消え、飛び込んできては爆散する映像・・・

照り返るシリコンウエハー／空気を切り裂くブルーレーザー／無機質なコンピュータ・ルーム／高速回転する磁気ディスク／マイクロスコープで拡大されたRISCチップのアーキテクチャ／ブルーレーザーでスキャニングされるホログラム・キューブ

挿入されるキャプション：

「２０１０年。」

「大容量の情報を超高速で受け渡し出来る通信技術－光ソリトン通信－が、今まさに世界規模で始められようとしていた。」
「しかし、光ソリトン通信網（SOCOM-net）の中には、通信の障害となるばかりでなく、接続された端末をも破壊する可能性を秘めたSolitary Packetと呼ばれる「正体不明のノイズ」が存在していた…」
「Solitary Packet…」
「一体誰が、何の目的で？　それは意図的にネット上に流されたものなのか？　それとも偶発的に生じたものなのか？」

衛星が地球全体の映像を捉える。明滅する光通信網。
衛星画像が順次拡大していく。デゾルブアウト、そしてデゾルブイン。
カメラアイは日本を目指している。
東京。その近傍の湾岸地区。巨大な建築物。カメラがその建築物の内部にまで侵入する・・・
ワイヤフレームで表示されるコンピュータ・ルーム。
そこにある一つの机。
その上の一つのコンピュータ端末。
その中の一つのCPU。
それを構成する一本の金導線・・・

挿入されるキャプション：

「千葉市　美浜区　打瀬」
「SOCOM-Japan社」
「地下３階」
「Solitary Packet問題対策室」

そして、ここからこの物語は始まる・・・

舞台に１本のサス。
黒ずくめの兵士が中腰で前方を見つめている。特徴的なHUDを付けた「dB」と呼ばれる兵士である。その傍らにもうひとりの兵士、奥山二等兵である。かれらは、Cyber-Forceと呼ばれる電脳部隊の兵士（Cyber-soldier）である。
時は二十一世紀中葉。世界中でサイバー・ウォー（電脳戦）の嵐が吹き荒れている。
Cyber-Forceとは、サイバーテロリズムに対するカウンターアタックのために組織された特殊部隊（「特殊電脳部隊」）である。個々の構成員はCyber-Soldier（Cy-Sol:サイ・ソル）または「電脳兵」と呼ばれ、自らの意識や存在をネットワーク環境中にアップロードする能力を持っている。遺伝情報・意識情報を含め生体を光ソリトン通信網に送り込むことを、solitonize（ソリトナイズ：ソリトン化）と呼ぶが、資質があり訓練を積んだ兵士であれば、誰でもソリトナイズし、ネットワーク内で様々なミッションを行うことが出来る。そして、これこそが、この戦乱の時代にあっての、最も有効な戦闘形態なのである・・・
ここは第７軍事研究所跡のメインコンピュータシステムである。
彼らは、そのシリコンウエハー上に存在していた・・・

ｄＢ　こちら、Cyber Force 2057。現在、目標地点、第７軍事研究所跡のホストコンピュータシステム内で待機中。サーバーアタックの気配なし。作戦は順調に進行している。障害はなにもない。大尉は「Faint voice」のコアに侵入したまま・・・

他方に明かりがつく。黒ずくめの三人の兵士。久保曹長、奥山二等兵、そして片桐伍長である。彼らもまた電脳兵士（Cyber-soldier）であり、ともに特殊電脳部隊Cyber Force 2057の構成メンバーである。

久保　・・・遅いな。
奥山　心配ですか？　深尾大尉のことが・・・
久保　大尉のことだ。心配することもなかろう。しかし、遅すぎる・・・　ｄＢ？　大尉から連絡は？
ｄＢ　まだ何も・・・
片桐　しかし、なぜ、大尉自らコアの中へ？　普通なら、ｄＢをまず斥候として送り込むべきだろう。
ｄＢ　私もともに行くと行ったのですが、大尉はここで待てと・・・
久保　ここ第７軍事研究所跡のメインシステムのコアは従来のものとは違う。量子コンピュータシステムに直結している。我々には未知の領域を含んでいる。「Faint voice」・・・
片桐　危険だと判断し、大尉自らが侵入？　そんなに危険なら、なおのことｄＢを・・・

片桐が言葉を継ごうとするのを、ｄＢが素早く断ち切る。

ｄＢ　ｄＢは死んでもいいから？　ｄＢなんて単なる通信兵だし、その上、人ではないしね・・・
久保　何を言っている、ｄＢ。
ｄＢ　Cyber-Soldier達のうわさ話を口に出しただけ。「ｄＢは単なるソフトウエアじゃないか」っていう・・・　「だって、ネットの外では出会ったためしがない・・・」って。でも、言っておくけど私は、歴とした人間・・・

久保　やめろ、ｄＢ。任務中だ。それに片桐、おまえのいた部隊では、どうだったか知らないが、ここではｄＢを捨て駒のように使うことはない。ｄＢ、すなわちdirect Binder（ダイレクト・バインダー）は本部との通信だけでなく、部隊の防御という重要な役割を担っている。

片桐　ｄＢの重要性は承知している。別に「ｄＢが危険地帯に斥候に行くべきだ」と主張したのではない。上官自ら単独で危険に身をさらすというのはよくないのではないか、と言いたかったんだ。もし、万が一のことがあったら、部隊は指揮系統を失って身動き取れなくなる・・・

ｄＢ　待って、深尾大尉より入電。奥山。インタラプタの準備。

奥山　了解。

ｄＢの傍らにいた奥山、背負っていたショットガン（フランキ　スパス　十二ゲージ、当然メタルストック付き）を肩から外し、メタルストックを開いてセットした後、派手なポンプアクションをかます。

ｄＢ　コアに向け、射撃準備。

奥山　（ためらって）しかし、中には大尉が・・・

ｄＢ　大尉からの指示。「今より３０秒後にコアにインタラプタで破壊コードを撃ち込め」という命令。

正面に向け、ショットガンを構える奥山。

久保　大尉は？

ｄＢ　破壊と同時に本作戦のレスキューポイント（救出地点）である軍のホストサーバに移動する。われわれは、そこで大尉と落ち合い作戦本部によるレスキューを待つ。

奥山　でも・・・

ｄＢ　「破壊コード」ロード完了。奥山、インタラプタのゲージを確認して。

ショットガンの側部で明滅していた赤のLEDが緑の点灯に変わる。

奥山　（目標を見据えたまま）クリア。

ｄＢ　移動プログラム、ロード完了。１５秒後に、ホストサーバに飛ぶ。（ふと怪訝そうな顔つきになり）大尉なんですか？　この情報？　少女へのコンタクトって？

地鳴りのようなハブノイズが響き始め、徐々に大きくなっていく。照明がそれに呼応し変化していく。

久保　どうした、ｄＢ？

ｄＢ　分からない。大尉から情報が、一方的に・・・　少女にコンタクトしたと・・・

片桐　少女？

ｄＢ　「量子コンピュータ」の中の生体部品・・・

片桐　生体部品って？

ｄＢ　大尉！

久保　大尉は？

ｄＢ　「作戦を遂行せよ。コアに破壊コードを撃ち込み、離脱せよ。レスキューポイントで会お

う。」・・・離脱まで後５秒。奥山、カウントダウン開始。
奥山　はっ！
片桐　・・・おい、なにか、振動を感じないか？

ハブノイズ大きくなり、舞台が振動に満たされる。
銃を抜く、片桐。

片桐　まさか、サイバーアタック？
久保　ｄＢ、これはなんだ？
ｄＢ　分からない・・・　ここのコンピュータシステムが・・・　まさか？
久保　ｄＢ、離脱だ！
ｄＢ　１秒後に離脱。奥山、撃て！

耐えきれないほどのハブノイズの嵐の中、ショットガンが火を噴く。
轟音がこだまする・・・　そして、一瞬のうちに闇が舞台を包み込む。

舞台袖に一人の男。派手な作業服、派手な靴、そしてそれ以上に派手な軍手（ゴム引き）。
３段重ねの段ボールを抱えているため、その表情は分からない。
それに気づく多川。

多川　（松田に）来てるよ。
松田　何が来てるって？
多川　駄、菓、子（入り口に向かい、あごをしゃくる）
松田　あっ！　はいはい、今行きます・・・

松田、小走りに入り口に向かい、ドアの開閉ボタンを操作。ドアのスライドする音。開いたドアをすり抜け、一番上の段ボールを下ろしてやる、松田。と、男の顔があらわになる。ハッピー・ケータリング・サービスの配送係、佐藤である。

佐藤　ハッピー・ケータリング・サービスです。どうも、遅くなって済みませんでした。お菓子の配達です。
松田　佐藤さん、いつもいつもお疲れ様です。ここにおいてもらえれば、私が・・・

そんな松田の言葉をよそに、対策室の中にずけずけと入り込んでくる、佐藤。

松田　佐藤さん！
佐藤　いいのいいの。今日のも結構重いから・・・
松田　ちっともよくないし・・・
佐藤　多川さん。今週はいい出物があるんですよ。（箱を開けて、駄菓子を取り出す）これこれ、この「うまそげ棒」。これね、茨城の駄菓子メーカーが作っているモンなんですけど。ここ見てください。このキャラクター、「ドラえもん」ですね。でも、よく見ると違うんですよ。これぢゃ、「ドラえもん」ぢゃなくて、「ばったもん」！　ぷっふふふふ・・・

せっかくの佐藤の「気さくなトーク」にも、多川はどこ吹く風。LCDを見つめ、顔色一つ変えずキーボードを叩いている。これぢゃあ、佐藤君が可哀想、っていうか、痛々し過ぎ。

松田　佐藤さん。せっかくの「おもしろトーク」なんだけど、多川さん全く聞いてないから・・・
吉谷　あのね、ここ部外者立ち入り禁止。だから・・・
佐藤　分かってますよ、吉谷さん。これにサインもらったら、すぐドロンしますから・・・

と、胸ポケットから紙を取り出し、ペンとともに松田に渡すが、ふと周りを見渡して・・・

佐藤　あれ？　岡ちゃんは？
澤山　あっ、どうしたんだろ。岡ちゃん？
松田　昨日、明け方まで作業していたらしく、今日は遅くなるって・・・
佐藤　そうなの。大変だね。今日はせっかく「ばかうけ」のニューテイストが手に入ったので・・・
吉谷　ニューテイストはどうでもいいから、早くサインもらって・・・

と、唐突に警告音。多川が俊敏に対応する。

多川　公開サーバに２１番ポートから侵入。
大河内　８０番じゃなくて？
多川　そう。HTTPじゃなくて、FTP。
澤山　どこぞのクラッカーか？
多川　いや、Solitary Packet臭いね。
澤山　マジ？
多川　感だけど、結構マジ。
大河内　紗英（吉谷）。慎ちゃん（澤山）。解析準備。

吉谷、澤山、ヘッドセットをつけ、ラップトップに向かう。プロジェクターに投影されるキャプション：
「警告：ポート２１にクッラクの可能性」
おどおどする、佐藤。

佐藤　な、なになに？
松田　しっ、お・し・ご・と。
多川　FTPで入ってきたのは初めてだな。でも何で、FTPポートへ？
大河内　どこかのアンプで、他の通信データからTCPヘッダ奪い取ったんでしょ。
澤山　そう以外考えられないね。これが本当にSolitary Packetなら・・・　でも、偶然のクロッシング・オーバーとは思えないな。
吉谷　まるでパケット自体が意志を持っているみたい・・・
澤山　ああ。
多川　２０番ポート、パッシブモードでオープン。データコネクション確立・・・　やるねえ。１０２４番から６５５３５番までのすべてのランダムポートがこじ開けられた。大量のデータが流れ込んでる。どうする？

プロジェクターの映像：
すべてのランダムポートが緑から赤に次々に変わっていく。
メモリ使用状況を示す赤い帯がどんどん伸びていく。同時に使用率のパーセントの値が増していく・・・

大河内　様子を見る。紗英、ダンプの方は？
吉谷　セーブ進行中。でも、固定ポートだけじゃ速度が追いつかない。
澤山　トラフィックの差が歴然か・・・
大河内　とにかく続けて。慎ちゃん、速度は？
澤山　毎秒300Gbit。いや、450Gbitに上昇。
多川　メモリの使用状況80%、90%・・・　まずいな。もうすぐメモリがあふれる・・・

警告音とともにプロジェクターの映像が赤く染まる：
「バッファオーバーフロー：ＯＳがクラッシュしました」

多川　バッファオーバーフロー。ＯＳがクラッシュ。

大河内　すぐにサーバをネットワークから切り離して！　やばいプログラムが走って、権限を奪われる可能性がある。
多川　物理的に切断。

プロジェクターの映像が消える。

大河内　彩、シスアドに連絡。
多川　紗英がして。あいつ私が相手だとすぐ切れるから・・・
吉谷　しようがないわね。分かった。

吉谷、キーボードを操作。プロジェクターに男の顔が現れる。公開用サーバのシスアド、木島である。

吉谷　Solitary Packet対策室の吉谷です。公開用サーバに対する外部から侵入が察知され、バッファオーバーフローが発生しＯＳのクラッシュを確認できましたので、安全のためサーバをネットワークから物理的に切断しました。
木島　（憮然と）分かっている。
多川　うわっ、マジで怒ってる。
木島　で、どうすれば？
吉谷　データ改竄や不当なプログラムの実行がないか、今から私がそちらに伺います。
木島　チェックならこちらで・・・
多川　粋がっちゃって、木島ちゃんったら・・・
吉谷　今回のクラッキングは一般のクラッカーによる侵害行為ではなく、光ソリトン通信網のノイズ、すなわちSolitary Packetが関与している可能性があります。ですから、そのまま何もせずにお待ちください。
木島　分かりました。しかし、私の許可なくサーバを切断するなんて、今回限りにしてください。
多川　何語ってんだ、木島？　おまえがぼけぼけだから、こっちが対応してやってるんだろう。ありがとうの一言でも言えって・・・
澤山　多川さん。なにげに聞こえてるから・・・
多川　あと、暇だからって、業務時間中に自分の家族のホームページ作ってるんじゃないぞ。「僕たち木島ファミリーでーす」ってなんだ？　「愛娘さやかちゃん大公開！」ってなに？　誰も見ないって言うの。
吉谷　分かりました。では・・・

吉谷、回線を切断。木島消える。

吉谷　多川さん、あのね。それでなくてもビミョーなところなんだから・・・
多川　私は寝ぼけたシスアドが大嫌いなんだよ。天下のSOCOM社の公開サーバがクラッキングの踏み台になるのは確実だね。あいつが管理している限りは・・・
澤山　寝ぼけたシスアドが嫌いだと言うより、幸せな家庭を持った男を憎悪しているって感じがしますね。

澤山の発言に頷く一同。

多川　あのね、君たちの「心理分析」は、いつも、根本的に的はずれだから。

吉谷　大河内さん、私、行ってきます。木島さんの怒りを早く静めないと・・・
大河内　そうね。頼むわね。
吉谷　慎ちゃん。セーブできたデータはテンポラリのディレクトリに入ってる。解析の方、任せたから。

吉谷退場。

佐藤　いやあ。なんか、かっこいいですねぇ。何やってるのかちっともわかんなかったけど・・・っていうか、多川さん。マジ、クールだから、ますます惚れちゃった・・・

一同に「まだいたのか、お前？」突っ込まれてしまう、佐藤。
速攻で松田にサインをもらい、「ぢゃ！」とか言って逃げ帰るように退場する佐藤。

澤山　（LEDを凝視して）へえ・・・
大河内　どう、解析の結果は？
澤山　TCPヘッダ、IPヘッダともども、公開WEBサーバから出たエコーか何かのを使っている。でも、データ部分はぐちゃぐちゃだね・・・　いやいや、ノイズの中にSolitary Packet特有の繰り返し配列が見られるね。それに、ヘッダチェックサムから、こいつが光ソリトン通信ネットワーク上のルータを通過してきたことが分かる・・・
多川　やはり、SOCOM-net起源のSolitary Packet。勘が当たったか。
大河内　Solitary Packetのハイブリッド化の可能性については、岡君から指摘されていた。それ自身は完璧に独立した情報パケットで、それ自体は干渉しあったり打ち消しあったりはしないけど、ソリトン通信のケーブルに散在しているアンプ、つまり光増幅器中では情報の乗り換え、クロッシングオーバーや交雑、ハイブリダイズが起こる可能性がある・・・
澤山　今までは、Solitary Packetは光通信ネットワーク上の単なるノイズでSOCOM-netのトラフィックの障害になるだけだと思っていたけど・・・
多川　FTPのデータパケットとハイブリッド化しちゃえるんなら・・・
澤山　インターネット上のすべてのサーバがバッファオーバーフローの攻撃対象になり得るってことだよね。
大河内　それだけじゃない。もし、データ領域に「悪意のあるプログラム」が存在したら・・・
澤山　Solitary Packetは巨大なデータだけど、単なるのノイズだ。そんなこと・・・
多川　FTPのデータパケットからヘッダをかすめ取ったんだ。ネットを流れてるウイルスやワームのプログラム部分が置き換わることだって十分に考えられるだろ？　そんなことになれば、サーバがダウンするだけじゃなく、サーバのデータ自体が破壊されたり、改竄されたりすることになる。とんだウイルス被害大発生ってことになっちゃうかも、それも世界規模で・・・
澤山　Solitary Packetの大きさから考えると、ウイルスとかワームとか呼べる代物じゃないでしょ。ダイナソー、恐竜ってところ？
松田　ダイナソーか・・・　インターネットが完膚無きまで破壊され尽くされちゃいそう。
大河内　とにかくSolitary Packetはソリトン通信だけではなく、インターネット全体の問題になるかもしれないってことね。まあ、今回のFTPパケットとのハイブリッドが万に一つの偶然であればいいんだけど。
多川　万に一つじゃ、確率が高すぎる。億にひとつの偶然であってほしいもんだよ・・・

舞台は溶暗する。

004　Lost　［ロスト］

なだれ込んでくる黒ずくめの4人の兵士達。かなり動揺している。
荒々しくHUDを外して、男が叫ぶ。

久保　何が起こった？
ｄＢ　分からない。作戦本部との接続が切断された。未だ回復せず・・・
久保　ｄＢ、現在位置の確認！
ｄＢ　おかしい！　Pharos（ファロス）サーバからの応答がない。ひとつも対応しない。それに、ここは軍のホストサーバではない。大尉はどこ？
奥山　曹長、大尉の姿が、深尾大尉が見あたりません！
久保　大尉が？　奥山、片桐。大尉を捜せ！

奥山、捜索に出ようとするのを片桐伍長が制する。

片桐　サイバーアタックか、さもなくば・・・
久保　さもなくば、何だ？
片桐　ｄＢ、アンカーを打て。そして、部隊全体をシールド。
ｄＢ　シールドしたら、こちらから通信パケットを送ることが出来なくなる。
片桐　ｄＢ、シールドだ！
ｄＢ　（久保曹長の顔色をうかがう）曹長？
片桐　これが、サイバーアタックに対する用心だ
久保　片桐、お前？
ｄＢ　こちら、Cyber Force 2057、本部応答願い・・・
片桐　ｄＢ、シールドだ、と言ったろう！
久保　（気圧されて）ｄＢ、シールドだ。
ｄＢ　シールド展開します。
奥山　一体何がどうなっているんですか？　それに、大尉はどこに？
片桐　あわてるな。俺にだってよく分からないが・・・　とにかく、情報を整理しよう。
久保　そうだな。ｄＢ、今回の作戦に関する情報をどこまで渡されている。
ｄＢ　みんなとさほど変わらない。ただの一等兵に過ぎないし。でも、大尉なら・・・
片桐　大尉がいない今、ｄＢ、つまり通信兵であるお前が、一番多くの情報を携えていることになる。情報を供出するんだ。
ｄＢ　情報供与には指揮官の指示が必要。
片桐　大尉はここにはいない。それに緊急事態だ。
ｄＢ　でも、あなたは指揮官ではない。階級からいけば当然、久保曹長がこの隊の指揮官となるはず。
片桐　（怒りをこらえて）・・・・・・
久保　ｄＢ、緊急事態だ。情報を共有しよう。
ｄＢ　了解です。今から全員に情報を送る。

後方のスクリーンに軍事データベースが開く。ｄＢにプリセットされているデータのすべてである。ｄＢの指示で画像や文字情報が次々に変化していく。

ｄＢ　Mission code: Faint voice・・・　ご承知の通り、これが我々Cyber Force 2057に与えられた作戦コード。攻撃対象は、うち捨てられた無人の研究施設。この地下に稼働中のコンピュータシステムがある。こいつが今回の敵のボスキャラ、Faint voice。これをソフトウエアレベルで完膚無きまでに破壊せよというのが、今回の使命・・・

久保　（ひとりごちて）何故、Faint voiceを破壊しなければならなかったのか・・・

ｄＢ　その質問は、兵士には許されていない。本部が壊せと言ったら、壊すまでだ。

片桐　ただ、疑問は残る。「何故我々が壊さねばならないのか？」だ。

奥山　単なる無人の研究施設・・・　爆弾投下で十分だ。

ｄＢ　そう。物理破壊で十分だと思う。例え、地下のコンピュータ・ルームが分厚いコンクリートで守られていようとも・・・

奥山　我が軍には、バンカー・クラッシャーがある。地下１５メートルまで潜り込み、地下施設を完全に破壊できる。

久保　わざわざ、我々を送り込まなくても・・・ということか。空爆や地上部隊の投入の記録は？

ｄＢ　一切ない。

久保　おかしいと言えば、おかしいな。データベース上削除されただけで、実際は・・・

片桐　すべての物理攻撃に失敗し、その情報を隠蔽した・・・

ｄＢ　その可能性もゼロではない。

久保　ｄＢ、Faint voiceに関するその他の情報は？

ｄＢ　量子コンピュータ。内在的危険性。排除せよ。ただ、それだけ・・・（ひとりごちて）いや、もう一つ不可解な情報がある。「Faint voice」は世界を破壊する・・・

奥山　世界を破壊する・・・　どういう事？　最終兵器ってわけ？

ｄＢ　分からない。詳しい情報はない。「Faint voice」は軍事兵器ではない。我が軍の研究機関の単なるコンピュータシステムに過ぎない・・・　情報の混線か？

久保　この研究施設が建てられたのは？

ｄＢ　研究所自体の情報が見あたらない。でも、稼動中のコンピュータシステムについては、ハードウエアのスペックから見て、２０年前。

片桐　どうして、データがないんだ？　我が軍の施設だというのに・・・

久保　我が軍の施設だからこそ、ないのか・・・

ｄＢ　（黙って、首を横に振る）

片桐　・・・Faint voiceの中核が「量子コンピュータ」であるという情報は前もって分かっていた。だが、その中に生体部品が組み込まれていることは・・・

ｄＢ　生体部品。大尉はそれを「少女」と呼んだ。その少女にコンタクトを試みた深尾大尉が消え、そして現在の状況となった。

片桐　大尉が鍵か・・・

久保　ｄＢ、大尉の居場所を含めて、周辺環境の確認。

ｄＢ　シールドを切ることになりますが、よろしいですね？

久保　（片桐が止めようとするのも聞かず、頷く）

ｄＢ　シールド解除。

低温のハブノイズ・・・　緊張が走る。

奥山　・・・さっきも感じたんだが、なんか変な感じだ。

久保　どうだ、ｄＢ？

ｄＢ　やはり、Pharos（ファロス）サーバからの応答がない。海峡を航海中に周囲の灯台がすべて停電した。そんな感じ・・・

奥山　　世界中のサーバがダウンしている？
ｄＢ　　でもそんな感じでもない・・・　分からない。
片桐　　我々は閉じこめられているのか？
ｄＢ　　閉じこめられているわけではない。たくさんのサーバの存在を意識できる。ただ・・・
片桐　　ただ？
ｄＢ　　意識できるが、理解できない・・・
片桐　　どういうことだ？
ｄＢ　　プロトコルが・・・　つまり、言葉が通じない。目覚めたら、行ったこともない「別の国」にいた・・・　そんな感じか。
片桐　　目覚めたら、別の国にいた・・・

舞台は溶暗する。

舞台袖に一人の男が現れる。壁に取り付けられたボックスに手をかざす。蛍光管の光が上から下に移動し、スキャンされる指紋。スクリーンに投影される情報：

ID: M031117T
岡　昌生　OKA, Masao
非常勤研究員　System Programmer, Temporary research fellow
Solitary Packet対策室　S/P Task Force Group,
masoka@m-tfg-j.socom-net.ne.jp

「認証中」の文字が点滅している・・・
と、警告音とともに「警告 WARNING!」の文字が浮かび上がり、タイプされる文字。
「協調性を欠く遅刻常習者につき入室不許可。」
表示されている顔写真にイタズラ書きが重なる。ヒゲとか、鼻毛とか、ほくろとか、あと、ほっぺたに渦巻きとか・・・　それを見てげんなりする岡。

岡　多川・・・　あーあ、社内のDataBaseにイタズラしちゃって・・・　SOCOMのシスアドがマジ切れしても知らねえぞ。

と、何事もなかったようにイタズラ書きは消え、「認証。入室許可」の文字。
スライドドアが開く音。一歩踏み出す岡。そこに駆け込んでくる松田。

岡　おっ、おはよう。
松田　おはようじゃないですよ。今何時だと思っているんですか？
岡　ああ、そうだね。で、どこいくの？
松田　帰るに決まっているじゃないですか。とっくに退社時間過ぎてるんですよ。
岡　じゃあ、気をつけて・・・　（通り過ぎようとするが、ふと気づいて）そうそう、京葉新線、人身で止まってるから、京成で帰った方がいいぞ。
松田　はい。京葉で帰らせていただきます。
岡　おっ、だまされないね。
松田　３ヶ月もそんな感じでいじられまくってたら、どんなお人好しだって、賢くなりますよ。岡さんの嘘、何となく見抜けるようになりましたから。微妙な眉毛の動きとか、目線とか、そんなんで・・・
岡　ほんと？　それはよかった。
松田　今のもダウト。すこしも「よかった」なんて思ってない。ホントは「つまんねーな」って思ってる。
岡　そんなことないよ。僕が君のことをどれだけ思っているのか、君には分からないんだね？僕の心の６３％は君で満たされて・・・
松田　（指さして）内容的にダウト。それに６３％っていう曖昧な数字が怪しすぎ。（時計を見て）あ、やだ。もーこんな時間。デートに遅れちゃう。彼ったら、待たされるのあまり好きじゃないから・・・
岡　（指さして）悲しいくらいダウト。
松田　（間髪入れずに、且つ力強く）正解！　じゃあ、帰ります。では、気をつけて。よい週末

を。（と、退場する）
岡　松田さんもね・・・

自分の机に向かいラップトップを開き、スイッチをたたく。スリープが解除されログイン・プロンプトが現れる。passwordを打ち込み、ログインする。
気づくと、対策室の扉の前に一人の男が立っている。珍妙な踊りをして、気づいてもらおうと躍起になっているのが、ちょっと痛々しくもある。セキュリティーカメラの映像からそれが気付いた岡が端末を操作し、扉を開けてやる。対策室内に入り込んでくる男。ハッピー・ケータリング・サービスの佐藤さんじゃん。

佐藤　いやー、岡ちゃん。いると思った。
岡　（端末から目線をはずさずに）あのなー。部外者なんだからさ、あんまり会社の中を・・・
佐藤　まあまあ、固いこと言わないように・・・
岡　で、何なの？
佐藤　まっ、たいした用ってわけじゃ・・・　にしても、岡ちゃん。いつも思うけど、この部屋なんかかっこいいよね。SOCOM社一のインテリジェント空間って言うの？
岡　そうかな？　コンピュータ・ルームの一部を間借りしてるだけみたいな感じじゃん。
佐藤　さすが世界一の通信システムを研究しているところだけはあるよね。ソリ・・・なんていったっけ？
岡　ソリトン通信。正確にはOptical Soliton Communication、光ソリトン通信ってやつ。
佐藤　そーそー、それ。すごい技術なんでしょ？
岡　自己位相変調効果による収縮とパルスの拡散現象を釣り合わせ、いつまでも波形を変えない孤立波、光ソリトン、を通信に・・・　なんて事言っても・・・
二人　（声を合わせて）わかんないよね。ははは―・・・
岡　とにかく、1 T bits/secっていう通信速度を達成できる。1秒間にDVD(1枚、8.5 Gbyte = 68 Gbits)を14.7枚分の情報を転送出来るってことさ。現行の１万倍の速度だぜ。
佐藤　すごいね。１秒間に映画１５本も見れちゃうのね？
岡　見れないから。１秒で１５本見れませんから・・・　転送できるだけ。まあ、理論上なんだけど・・・
佐藤　理論上？
岡　やってみたら、そこまで通信速度は上がらなかった。光ケーブルネットワークの中に膨大なノイズが紛れ込んでいて、それがトラフィックを圧迫していた。それが原因で・・・　その雑音、Solitary Packetっていうんだけど、その発生の原因を探り、対策を講じようっていうのがうちらの仕事。
佐藤　なんか、同じ説明、何度も受けてるような気がするよね。
岡　俺も、何度も説明しているような気がする・・・
佐藤　これって、デジャビュ？
岡　単におつむの底が抜けてるだけじゃないの、お互いに・・・　で、何なの？　今夜の用事は？
佐藤　そうそう、そうでした。今夜は、「ばかうけ」フリークの岡ちゃんのために・・・（と、ポケットより、ばかうけを取り出し、示す）コレを持ってきたんですよ。
岡　まさか、ニュー・テイスト？
佐藤　イェス。っていうか、ニューなだけじゃなくレア。
岡　（食いついて・・・）レ、レア？
佐藤　「ムロアジ・くさや風味」

岡　　くさや！
佐藤　それも、伊豆大島限定。
岡　　げ、限定・・・
佐藤　そう、ここじゃ、絶対にお目にかかれないし、今度も出会うチャンスはないってぐらい、レア。
岡　　（つばを飲み込む）
佐藤　（個別包装をばりっと破り・・・）この馥郁とした香りが鼻孔を・・・（と、むせて咳き込み）ごほごほ、って、きっつううう・・・　目にも来るな、コレ・・・
岡　　（再び、つばを飲み込み）是非とも、そのアイテム。試してみたい。っていうか、食べたい・・・

と、「ばかうけ」に手をのばす岡。しかし、佐藤は意地悪でもするように、岡に渡さない。

佐藤　でね、ものは相談なんだけど、この前、岡ちゃんに頼んで焼いてもらったDVD（と、手にしたDVDを示す）なんだけど、うまく読み込めなくなっちゃったんだよね。なんつーの、エラーとか出て、終わっちゃうの・・・
岡　　で、俺に修復してくれと・・・　「ばかうけ」のレア・テイストと交換に？
佐藤　そんな言い方したら、なんか、小狡く駆け引きしてるみたいじゃん？
岡　　「小狡く駆け引き」してるでしょ？　しょうがないな、貸してDVD。
佐藤　そう来なくっちゃ。（と、DVDを岡に手渡す）
岡　　（受け取ったDVDをしみじみ眺めて）でもなあ、佐藤さんの趣味、結構マニアだから、ちょっと、きっついんだよね・・・
佐藤　まあまあ、そこはちょっと堪忍して頂いて・・・

岡、DVDをラップトップに入れチェックを始める。ラップトップから微かに漏れる「いかがわしいあえぎ声」・・・　と、舞台後方に大河内が現れる。

大河内　佐藤さん。なにやってるの？　ここは部外者立ち入り禁止よ。
佐藤　やべっ、コロボックルの襲撃だ。隠れろ！
大河内　誰が、コロボックルだ！

佐藤、少しでも我が身を隠そうと、「ばかうけ（ムロアジ・くさや風味）」でを隠す。何の隠蔽効果も期待できない上に、それ臭いがきついんじゃ・・・

佐藤　臭っ、っていうか、目にガツンて来た。涙が・・・
大河内　佐藤さん。出口はあちら・・・
佐藤　目がぁ、っていうか、岡ちゃん、DVD。

と、「マニアな映像がてんこ盛りに入ったDVD」をひっつかむと、逃げるように退場。

岡　　佐藤さん！　「ばかうけ」！　「ばかうけ」置いてってよ！

岡、佐藤を追うが、取り逃がしてしまう。とても口惜しそうだ・・・

岡　　「ばかうけ」・・・

大河内　そこまで口惜しがることか？
岡　　だって、「ムロアジ・くさや風」だぞ！
大河内　だぞ！って、おまえ・・・（ひとりごちて）恐るべし栗山米菓・・・　（我に返り）あのね、岡くん、こんな夜中に研究所内に部外者を入れるのは、ちょっとどうかと思うよ。
岡　　部外者っていったって、佐藤さんだぜ？　サイバーテロリストに見える？
大河内　見えない。でもダメ。セキュリティ上の・・・
岡　　堅いねえ、ほんと。
大河内　当然でしょ。
岡　　で、クラックされたんだって？　公開サーバ・・・
大河内　（ため息をつき）そうなの。紗英のリポートに詳しく・・・
岡　　まさに今、読んでるところ。
大河内　岡君が指摘した通りになったわね。光ケーブルの各所に設置されている増幅器でソリトン情報パケット同士がクロッシングオーバー、乗り換えを起こす可能性がある・・・
岡　　光ソリトンは孤立波だから、コリジョン、つまりデータの衝突、を起こさない。
大河内　だから、ソリトン通信においてコリジョン回避のアクセス制御は稼働してはいない。
岡　　だが、時間とともに拡散していくソリトンの波形を戻してやるアンプの中で、コリジョンが起きる可能性がある。その増幅方法が、ソリトンの拡散と収縮のバランスを崩してしまうからだ。

岡は会話の最中もコンピュータ端末と向かい合ったままである。話している言葉は、まるで無意識に口からこぼれ落ちているかのようだ。

大河内　原理的に脆弱性が生じるという訳ね・・・
岡　　しかし、FTPポートとはね・・・
大河内　（不意をつかれて）なに？
岡　　だから、FTPポートから侵入してきたんだろ。
大河内　ええ・・・
岡　　そいつは凄いな。
大河内　みんなも驚いていたわ。偶然とは思えないって・・・
岡　　偶然とは思えないどころか、絶対に偶然ではない。
大河内　！
岡　　よりシンプルなヘッダを持つ、例えばUDPプロトコルで侵入を受けたのなら、単なる「頭のすげ替え」で、ある程度説明できかもしれない。だが、FTPはTCPという信頼性の高いトランスポート・プロトコルを用いている。TCPはフロー制御や分割転送などを管理する「より複雑なヘッダ」を持っていて、且つそのヘッダはデータ部分と密接な連携を持っていなければならない。パケットの構造に一貫性がなければ・・・
大河内　無意味なパケットとして、破棄される。単なる偶然の組み換えでは説明できないか・・・
岡　　通信プロトコルの仕組みをある程度理解した上でデータの編集が行われたということだ。では、誰がそれをやったのか？
大河内　今までの調査から、Solitary Packetはいかなる発信源も持たないネットワーク上のノイズだという事が分かっている・・・
岡　　つまり、Solitary Packet自身が、それをやったんだ。Solitary Packetは通信プロトコルを理解する「知性」と、サーバに侵入しようとする「意志」を持っている・・・
大河内　Solitary Packetは「知性」と「意志」を持っている・・・（考え込んでいたが、ふと岡の顔をのぞき込み）って、頭、大丈夫？　狂ってないよね？

岡　　俺が？　お前が？　それとも世の中全体が？
大河内　ひとえに、あ・な・た。
岡　　狂い始めているのかも・・・　でも、可能性はあるだろ。仮説としてもキャッチーだし・・・
大河内　「キャッチー」とか、そういうの関係ないだろっ。三流ＳＦでもあるまいし・・・
岡　　まさに三流ＳＦだろ？　まっ、俺の人生なんか、ほぼ三流ＳＦみたいなもんだったが・・・
大河内　それ、大学院で量子力学研究してた人が言うと、「いけてる」響きになるね。
岡　　量子力学というより、正しくは「量子コンピュータ」だ。ばりばりの三流ＳＦだろ？　あんなもん、ガイキチか、よほどのアホウしかやらねえって言うの。俺はアホウじゃないから、狂うすんでまで行っちゃったよ・・・
大河内　だから、やめたんだ、大学院。
岡　　（ふと、真顔になり）まーね。でも、せっかく「量子コンピュータ」から逃げおおせたと思ったら、今度は「Solitary Packet」・・・　どこまで行っても三流ＳＦ。悪夢から覚めて、また悪夢に落ちちゃったって感じ？
大河内　だからこそ、「Solitary Packet」を駆逐しなきゃ。それが、君の三流ＳＦ的悪夢の終焉を意味するんだから・・・
岡　　あのね、「Solitary Packet」の完全なる駆逐方法については、すでに３ヶ月も前に提言していますよね。光ケーブルに設置されたすべてのアンプを切り、且つそれに繋がれたのすべての光通信関連サーバを１週間停止させる。原理的には減衰しないソリトン波も、実際はアンプやそのほかの増幅装置がなければ、拡散作用に勝てず減衰して消えるはず・・・
大河内　それはね、岡君。インターネット１週間停止しろっていうのと同じ事なわけ。光ソリトン通信用の光ケーブルは、従来の光通信系のものと共用なんだから・・・　止められるわけがないでしょう、インターネットを・・・
岡　　お願いしてみればいいじゃん。SOCOM社の社運をかけて・・・
大河内　そんなことしたら、社運っていうか、命運尽きるって言うの。それじゃなくても、サービス開始を２ヶ月後に控えて微妙なときなのよ。このことがちょっとでも漏れたら、「株価」に響く・・・
岡　　「株価」って、重役みたいな発言だね・・・　あっ、お前、ストックオプション（自社株購入権）で自社株買っちゃってるね？
大河内　ぎくっ。（と、動揺するが、きっぱりと）いいえ。
岡　　ボーナス代わりとか言われちゃって、購入権もらったあげく、早速行使しちゃったね・・・
大河内　そーそー、尻馬に乗っちゃったってやつ。でもここ一ヶ月で３倍だよ、３倍！
岡　　やっぱり、買ってるんじゃん。
大河内　（きっぱりと）いいえ。
岡　　でも、２ヶ月後には紙くずだぜ。
大河内　かなり、ぎくっ。（と、動揺する）
岡　　このままだとね・・・
大河内　岡君。兎にも角にも、この三流ＳＦを終わらせる事が必要って事なの。（ちょっと、キャラ入っちゃって）このSolitary Packetという名の悪夢を終焉させられるのは、君だけだ。
岡　　（顔を付き合わせて）今、ちょっとだけ現実から目を背けてるね。
大河内　とにかく、今度の月曜日は９時に来い。午後９時じゃなく、朝の９時。
岡　　そこは現実的・・・
大河内　じゃ、おつかれさん。

退場する、大河内。そして、舞台は暗転する。

少女が立っている。
その傍らにHermit.

少女１　・・・星のはなしをしようか？
Hermit　星？
少女１　お空の星。双子の星の話・・・
Hermit　ああ、話してくれないか？
少女１　シリウス。おおいぬ座の・・・
Hermit　天狼星と呼ばれることもある。
少女１　そう、天狼星。夜空では月の次に明るい星。それが二連星であることが分かったのは、１８６２年のこと…
Hermit　二連星？　だから、双子の星・・・
少女１　私は・・・　私たちは、いいえ、もう一方の私は、その星に向かってまっすぐに飛んでいくの。
Hermit　飛んで？
少女１　宇宙船で。それには大きな帆がついていて・・・　ほら、水面を滑るように走るヨットみたいな・・・
Hermit　ヨット？
少女１　そう、それが太陽からの風を受けて、船はどんどん加速していく・・・

舞台後方にもうひとりの少女。まるで、少女が分裂したようだ。後ろの少女が言葉を継ぐ・・・

少女２　・・・火星を越え、木星の脇をすり抜け、どんどん速くなっていく・・・
Hermit　太陽からの風？
少女達　うん、／**風**。／太陽からは強い風が吹き出てる。／大量の「粒」の／**風**・・・／その風は／目に見えない小さな粒／からできていて、私の／背中を優しく、でも確実に、／押してくれる。
少女１　光の速さでも８年と７ヶ月かかる遙か遠くの星に向かって・・・
少女２　・・・大きな宇宙船。その真ん中の小さなコクピット。私の目の前には小さな、本当に小さな窓がついていて、窓の外には宇宙がある・・・　そして、窓の遙か先に・・・
少女達　**宝石のように青く白く輝く星がある・・・**（太字はユニゾン）
Hermit　天狼星。双子の星・・・
少女２　でも、その一方は、**すでに死んでいる・・・**
Hermit　なに？
少女１　双子星の片方は死んでしまった。何億年以上も前に・・・
少女２　天狼星は、あの宝石のように輝くあの星は、悠久の時を亡骸とともに生きてきた・・・
少女１　長い、とても長い時間。もう一方の自分が死に、冷たくなっていくのを見つめているしかなかった。でも・・・
Hermit　でも？
少女１　その悲しみだって、もう長くは続かない・・・　だって、もうすぐだから。私が、もう一方の私が帰ってくるの。

Hermit　どうして分かる？
少女達　**私たちはつながっている。意識がつながっている・・・**
少女２　私の目を通して・・・
少女１　私は宇宙を見ることができた。そして、私の皮膚を通して・・・
少女２　科学者達の刺すような冷たい視線を感じることができた。
少女１　通信なんかじゃなく。全く別の回路でつながっていたの。
Hermit　シンクロニシティ・・・　光の速度を超える情報伝達。
少女達　まわりの研究者達は半信半疑／いいえ、**ほとんど信じていなかった。**／ある時私は銀色に光る大きな星がすぐ横に見えると／彼らに言ったことがある。／彼らは船の位置の分析から、／それが海王星であると結論した。／私と向こうの／私との間で、電波による通信の形跡はない／ことは承知しているのに／**信じようとしなかった。**
少女１　私が言ったその星の２つの衛星・・・
少女２　トリトンとネレイド・・・
少女１　の位置を、正確に言い当てたというのに・・・
少女達　シンクロニシティ／共時性。／それこそが、この／量子通信システム／の研究対象だったというのに・・・／おかしな人たち・・・／だからもう／**話すのをやめた・・・**
Hermit　研究者達は、彼らはどこに行った？
少女1/2　（同時に二つの言葉を語る）消えた／殺した
Hermit　どっちだ？
少女1/2 **どちらも本当。**
少女1/2 時が乱れているの。／いいえ、時間が重なり合っている。／たくさんの時間が重なり合っているの・・・／**あの時から。**
Hermit　あの時？
少女１　そう、あの時から・・・　分かるでしょ？
Hermit　・・・・・・

舞台後方の少女はすでに消えている。

少女１　あの時から、もう８年。もうすぐなの。もうすぐ帰ってくる。「光」と一緒に・・・　もう帰ってきてもいいはずなのに・・・（ふと、怪訝そうな顔になり）ねえ、Hermit。
Hermit　なんだい？
少女１　ねえ、「私」はどこにいるの？

立ちつくす少女。それを見つめるHermit。
唐突に暗転する舞台。

舞台の上に一本のサス。
ｄＢが立っている・・・

ｄＢ　一体我々はどこにいるのか・・・　迷い始めてから、一体どれだけの時間が経ったのだろう？　ネットの中を超高速で移動する我々には生体時間という概念はない。が、出来るだけ早く生還することが必要だ。我々が作戦本部に残してきた「抜け殻」に「意識」を戻すこと。「抜け殻」、すなわち、我々の肉体。生命維持装置につながれた魂の抜けた「肉の塊」に・・・　このままでは、遅かれ早かれ「意識」が「意識」自身を繕うだけの情報量を保持できなくるだろう。そうなったら、我々はランダムノイズと成り果てネットの中に拡散してしまう。だが、どうすれば戻れるのか？　ここは我々の知っているネットとは明らかに異なっている。その構造や機構は似てはいるが、スペックが低すぎるのだ。まるで・・・　ほんとまるで・・・（言いかけて言葉に詰まる。いや、言葉にすることをためらったのかもしれない）私は現在おかれているネット環境を調べるため、流れている情報パッケトを拾い読みした。我々が現在いるネットワークはオープンに使われているものであり、決して無限ループの中に閉じこめられたものではないということ。ここで用いられている通信プロトコル自体も、そんなに特殊なものではなく、理解できそうだと言うこと。これらのことは、すでに久保曹長に伝えてある。だが、ひとつ重要な事実を伝えるのを私はためらった。確認できたメールのすべてが遠い過去からのものであったということを・・・

舞台上に立っている他の兵士達に明かりが差す。

久保　どうした、ｄＢ？
ｄＢ　聞こえる・・・
奥山　何が？
ｄＢ　大尉だ。大尉の声だ・・・
片桐　深尾大尉の？
ｄＢ　静かにして！　とても聞き取りにくい。
久保　（小さな声で）弱いのか？
ｄＢ　ノイズが・・・　いや、エコーが・・・　声が重なって聞こえる。
片桐　どういうこと・・・
ｄＢ　（強く）静かに！

舞台後方に、男の後ろ姿が浮かび上がる。

男　ｄＢ・・・

その声は多重エコーがかかったように聞き取り難い。

ｄＢ　大尉。大尉ですね！
男　ああ・・・／いや・・・

二つ、またはそれ以上の言葉が重なりうねって聞こえる。

ｄＢ　深尾大尉！
男　ｄＢ、よく聞くんだ。我々はあまりよいとは言い難い状況に追い込まれた・・・
ｄＢ　作戦は失敗したのですね？
男　それ以前の問題だ。我々は生還不可能となった・・・
ｄＢ　生還、不可能？　それはどういうことですか？
男　帰れなくなったのだ／帰る場所がないのだ
ｄＢ　（聞き取りずらそうに）いったい？
男　君たちは飛ばされてしまった。
ｄＢ　飛ばされた？
男　そう過去へと。君のことだ、うすうす感づいていただろう？
ｄＢ　・・・・・・（口ごもる）
男　このネットワークを流れているNTPパケットを拾ってみろ。
ｄＢ　NTP！　どうして気づかなかったのか？　いや、気づきたくなかったのだ。真実を知るのが怖かった・・・　NTP。それは、ホスト同士の時刻調整をするための小さなデータパケットだ。それは我々の世界とさほど違った構造ではなかった。すべてのNTPデータパケットが口をそろえて言う。ここは、２０１０年であると。つまり、我々は過去に飛ばされたのだ。５０年近い時を越えて・・・
男　ｄＢ。確信したか？
ｄＢ　はい・・・　でもどうして？
男　理由を知る必要はない。ただ、理解しておいて欲しいのは、もう生還の見込みはないということだ・・・
ｄＢ　時を戻ることはできないのですか？　みんなになんと伝えれば・・・
男　君は優秀なｄＢだ。伝え方は、君自身で考えろ。
ｄＢ　大尉。大尉は今どこに？
男　私は・・・　私は、もっと複雑な時の流れに飲み込まれてしまったようだ。不規則に流され続けている・・・
ｄＢ　大尉。私は・・・
男　ｄＢ。「亜空間創造」または「バーチャル・リアライズ」という言葉を聞いたことがあるか？
ｄＢ　「バーチャル・リアライズ」！　大尉、それは・・・
男　過去に、それを実際に行ったｄＢがいる。いいか、ｄＢ。いや、林一等通信兵。それが唯一の望みだ。もし、君が部隊を救いたいのなら・・・

ノイズが通信を妨害する。後方に立っていた男が消失する。

ｄＢ　大尉。深尾大尉！

もう二度と通信が回復することはない。

久保　どうした、ｄＢ？
ｄＢ　通信が途絶えた・・・
奥山　大尉は無事だったんですか？
ｄＢ　ああ。だが、我々より厄介な状況下にいる・・・

奥山　　我々より厄介って・・・
片桐　　で、指示はあったのか？
ｄＢ　　これからは、我々だけで行動しなければならない。大尉にはもうこれ以上期待できない。今から、久保曹長が指揮官となる。お願いします、曹長。
久保　　（無言で頷く）
ｄＢ　　それに本部からの支援も期待できない。
片桐　　本部からの支援がないとはどういうことなんだ！
ｄＢ　　落ち着け！　今から、我々の置かれている状況についてきちんと説明する。ただ、私自身もまだ、混乱している。頭を整理するために、少し時間が欲しい。ひとりに、ひとりにしてくれ・・・

ｄＢの剣幕に気圧されて、後退する兵士達。
舞台の上は、再び、一本のサスだけとなる。
ｄＢが薄暗いサスの中で語り出す・・・

ｄＢ　　「バーチャル・リアライズ」。それはCyber-Soldierの実体化である。情報である我々が、物質化する方法だ。単なる作り話、怪談めいた物語として一笑に付されるべきものかもしれないが・・・　あるCyber-force部隊が、西アジアの軍事拠点のコンピュータシステム上で作戦実行中に、猛烈なサイバーアタックをうけ、退路を断たれた。しかし、瀕死のはずのその電脳部隊がサイバー空間から飛び出し敵軍の真っ直中に亡霊のように現れ、持っていた重火器を用いて敵兵を倒したというのだ。結局、善戦むなしくそれら兵士は帰還することはなかったが・・・　そんな魔法のような「実体化」は、その部隊のｄＢによって行われたという。しかし、その力を発揮するためには、いかなる優秀なｄＢであろうとも、代わりに自らの命を差し出さねばならない。エネルギーの大量消費が必要とされるからだ。実際ネットワーク内における我々のエネルギー源は自らの持っている「情報」である。エントロピーと呼ぶことも可能だが、我々は「情報」の一部をランダムノイズに還元することと引き替えに、行動している。ｄＢは通信だけではなく、部隊の保護という任務もあるため、膨大な情報とともに行動している。しかし、エネルギーの消費が激しく、もはや消費できる情報がなくなってしまったときは、自らの記憶を用いなければならなくなる。つまり、記憶をひとつひとつ捨て去って行くのだ。この行為は、どうしてか、生理的な痛みを伴う。自分の記憶をノイズに還元するのは、自分の指をむしり取って投げ捨てるのと同様な行為なのだ。Cyber-Soldierの実体化を支えるだけのエネルギーを得るためには、相当な記憶を失うことを覚悟しなければならない。そして最後には、自分の遺伝情報まで切り売りし、ランダムノイズとして拡散することになる。つまり、死ぬのだ。部隊を救うために、私は本当に死ねるのだろうか？　全身を自ら引きちぎるような激痛に耐えながら・・・

ｄＢの言葉の終わりに合わせるかのごとく、照明がフェードアウトしていく・・・

舞台上に岡、多川、吉谷、そして松田。みなコンピュータに向かってなにやら仕事中・・・
岡は袋菓子の中に箸をつっこんではがつがつ食い散らかしている。

松田　岡さん。朝っぱらからよく食べますね。
岡　ああ、朝飯だから。（口の中にお菓子が詰まって、聞き取りづらい）
松田　三食、スナック菓子って、栄養偏りませんか？
岡　バランスよく食べてるから、大丈夫。甘いのとか、辛いのとか、堅いのとか、柔らかいのとか・・・
吉谷　「バランスよい」っていうことなのか、それって？
多川　いいじゃないの、カロリーはスナック菓子でも飯でも取れるわけだから・・・　主原材料、小麦か、米か、トウモロコシだろ？　パンとかご飯食ってるのと一緒じゃん。
岡　多川さん、ご名答。

そこへ澤山が登場する。岡が食べている袋菓子に気づき・・・

澤山　おっ、名古屋の駄菓子メーカー松山製菓のテキサスコーン（焼肉味）ですね、岡ちゃん。
岡　ん？（袋を確認して）ああ、そうだ。
澤山　それはそうと、それにカードついてませんでした？
岡　カード？
澤山　そのテキサスコーンの袋の中に一緒に入ってませんでした？
松田　それなら、ゴミ箱の中に・・・
澤山　（ゴミ箱から拾い上げ）あー、なんてことしちゃうんですか。せっかくの名古屋名物カードを・・・
岡　名古屋名物カード？　集めてんの、そんなもん？
澤山　カードはとりあえず集める。オタクの基本でしょ？　一部好事家の間では、結構人気なんですよ、名古屋名物カード・・・
吉谷　一部好事家って、全国で６人ぐらいしかいないんじゃないの？
澤山　そうかもしれませんが・・・　とにかく、この中に「名古屋コーチン」や「きしめん」に混じって、レアカードとして「ストイコビッチ」が入っているらしいんです。
一同　ストイコビッチ？
岡　グランパスの監督になった？
吉谷　それ、担がれてるだけでしょ？
多川　そもそも、零細駄菓子メーカーがグランパスと版権の協議をしているとも思えないが・・・
澤山　分かりませんよ。零細駄菓子メーカーは我々の理解を遙かに超えたことを平気で、またはうっかりやっちゃうますからね。
一同　どっちにしろ、法律違反だから、それ。
澤山　（袋を破りながら）どきどきしますね・・・
一同　どきどきしないし。
澤山　あっ！（カードを見て、小さな悲鳴）
松田　ストイコビッチ？
澤山　「しゃちほこ」でした。がっちり、かぶりました。
松田　順当でしたね・・・

岡　　そんな、トレカフリークの慎ちゃんに、これを見せてあげよう。

　　と、岡が澤山にカードホルダーを手渡す。

澤山　（中を見て）こ、これは、東海道五十三次！
岡　　そう、永谷園の・・・　フルコンプリート。
吉谷　東海道五十三次なら、私もコンプリートしているわよ。
松田　紗英さんまで・・・
吉谷　あれって、１５枚集めて永谷園に送ると全５５枚フルセットが抽選で当たるでしょ。それで・・・
岡　　その中に２組入っているだろう。確かに１組は抽選で当てたが、もう１組は一枚ずつ集めたんだ。リアル・フルコンプリートってわけ。
澤山　すげー・・・
岡　　まあ、１０００袋は買ったね・・・　１袋に５食分入っているから５０００食ってところか。
吉谷　５０００食って、朝昼晩三食、食べ続けても５年はかかる計算ですが？
岡　　そうですが、なにか？
松田　マジで、５年間お茶漬けのみ、っていうか、「お茶漬け漬け」、略して「お茶漬け」？
岡　　好きだったから、お茶漬け。そんなこともあって、今は見るのも嫌だが・・・
松田　大変なんですね、オタクも・・・
岡　　（こっくり頷き）慎ちゃん。真ん中の辺りに「蒲原の雪景色」があるだろう？　それをよく見てみな。
澤山　これですね・・・　（と、凝視して、叫ぶ）こ、これは！
岡　　「蒲原・夜の雪」のキラカードだ。
吉谷　おいおい、永谷園がキラカードなんか・・・
澤山　蒲原のキラカード！　すごい。噂は本当だったんだ、「蒲原・夜の雪」のキラカード。雪景色がきらきら銀色に輝いている。目の奥が痛い。直視できない・・・
岡　　ビュリホーだろ？　これぞ、リアル・コンプリートってもんだ。
澤山　（ぶるぶる震えて）岡ちゃん。すげえ、これすごいよ。僕も欲しい。っていうか、集めたい・・・
岡　　もう遅い、９７年に生産を中止している。
澤山　そう聞いて、ますます欲しい・・・　これ、喉から手が出るほど、欲しい・・・
岡　　（真顔で）だめだ。俺の青春だ。

　　と言って、岡、手を差し出す。澤山、名残惜しそうにカードホルダーを返す。

松田　永谷園のお茶づけ海苔が青春だなんて・・・
澤山　（至福というか羨望というか、そんな感情が綯い交ぜになった表情で）最高だ。
松田　（澤山の言葉を受けて）そうかぁ？

　　と、舞台後方に大河内が現れる。

大河内　みんなおはよう。朝も早くからご苦労さんですね。岡君もいますね。
岡　　いるよ・・・
大河内　朝の会議で、三次元ホログラム・メモリーが試験的に使用できるようになったとの知らせ

を受けた。
吉谷　結構、早かったね。
大河内　そうね。こちらからもかなりせっついたから・・・　ねっ、岡君。
岡　ああ。
大河内　急でなんなんだけど、これからホログラムメモリー開発元のオプチカルフィジックス社の説明会が開かれるそうよ。ブリーフィング・ルームの方に集合して。ねっ、岡君。
岡　なぜ、俺にばかりふる？　気があるのか？
大河内　（きっぱりと）それはない。松田さん。お茶の用意してもらえるとうれしいな。
松田　はい。（といって、足早に退場）
大河内　さあ、みんな急いで。

吉谷、澤山も足早に退場する。大河内、未だ立ち上がろうとしない岡の肩をたたき・・・

大河内　さ、岡君も・・・
岡　分かっております。

岡、立ち上がり退場。舞台後方で多川が一人残っている。

大河内　彩？
多川　５分だけ時間いいかな？
大河内　どうしたの？
多川　SOCOM本社の対策室を探れないか検討してみてって言ってたよね。
大河内　あちらの情報がほとんど流れてこなくなっちゃったから・・・　で、何かうまい戦略を見つけたの？
多川　それで、この週末・・・（言いよどみ）っていうか、ちょっとこれを見て欲しいんだ。

多川、大河内を自らのLCDの前に導く。

多川　あんただけには見せておこうと思って・・・
大河内　なに？
多川　SOCOM本社と契約しているセキュリティ会社のHDにあったのをダンプしたんだけど・・・
大河内　本社ではなく、セキュリティ会社をクラックしたってわけ？
多川　セキュリティ会社なのにセキュリティは本社より甘かった。それに足跡は残してないから・・・

キーボードを操作する多川。LSD上にムービーが現れる。サンドノイズ。そして、びっくりしたようにカットインする映像。セキュリティ・カメラの視点。天井からの俯瞰映像。コンピュータ・ルーム。

大河内　これは？
多川　本社のコンピュータ・ルーム。
大河内　でも、コンピュータが・・・
多川　そう、破壊されている。

ルーム内のコンピュータが明らかに破壊されている。所々で紫色の煙が立ち上っており、時折思いついたかのように、青白い火花が散る。その映像を食い入るように見つめる大河内と多川。

大河内　いったい何が？
多川　　（首を横に揺る）

映像の中に、亡霊のように一人の女が現れる。手に鉄パイプを持っている。体は傷だらけで、生乾きの血が至る所にくっついていて・・・

大河内　誰？

女の視線がセキュリティ・カメラに向く。カメラがズーミングし、大きく肩で息をしている女の上半身を捉える。女は放心したようにカメラを見つめている。唇がわなないている・・・　まだあどけなさを残す顔立ち、目元のソバカス、化粧気は全くない・・・　システムが、首からぶら下がったIDタグを自動認識する。ディスプレイ上のタグが明滅し、ポップアップする情報：

ID: L026875T
Lucy S DUNER, phD
System Programmer, Temporary research fellow
S/P Task Force Group, lduner@m-tfg01.socom-net.ne

多川　　ルーシー・ダナー博士。非常勤プログラマー、本社のSolitary Packet対策チームの・・・
大河内　ルーシー・ダナー・・・

映像の中、カメラを見つめる彼女の目つきがちょっとだけ険しくなる。脱力していた体に力が入り、右腕が振り回される。と、画像は消え、サンドノイズとなる。鉄パイプがセキュリティ・カメラを打ち砕いたのだ。

多川　　手に入れることができたのは、これだけ。本社が手を回してすべてのデータが回収されたみたい。とにかく、本社のSolitary Packet対策チームで某かの事件が起こったのは事実ね。この映像から察するに、メインフレーム自体も深刻な被害を被っているんじゃない？
大河内　Solitary Packet対策に関して、本社の対応がおざなりになった。これがその真相って訳ね。で、ルーシー・ダーナーは、今どこに？
多川　　分からない。さすがにSOCOM本社のFire Wallは敵に回したくない・・・
大河内　彼女の身柄はSOCOM本社か、さもなくば・・・
多川　　NSA、国家安全保障局？　（鼻で笑い）・・・かもね。
大河内　だったらどうする？
多川　　その事実さえ分かれば、十分だろ？　このネタは「かなりやばい」ってことが分かったことになるんだから・・・（時計を確かめて）もう時間ね。行かなきゃ・・・　（立ち上がる）
大河内　そうね。行きましょう。（と退場しようとするが、立ち止まり）彩、この情報は重要よ。みんなに伝えておいた方がいい。取得のやり方は違法だったけどね・・・

大河内、多川とともに退場。舞台は暗転する。

009　Attack　［アタック］

舞台上にCF2057の兵士達。

片桐　過去に飛ばされただと？
ｄＢ　そうだ。ここは２０１０年のネットワークの中だ。
片桐　２０１０年？　一体どういうことだ。（ｄＢに掴みかかろうとする）
久保　（それを制して）片桐、落ち着け。
奥山　我々は、どうなるのですか？　生還は？
ｄＢ　本部とのコンタクトが確立できない以上、生還の見込みは・・・ない。
奥山　我々は、ただ消え去っていくのを待つしかないのですか？　この過去のネットワークの中で・・・
久保　ｄＢ、そうなのか？
ｄＢ　・・・・・・
久保　答えろ、ｄＢ。
ｄＢ　どうしていいか、分からない・・・
片桐　（ひとりごちて）原因だ・・・
久保　何だ、片桐？
片桐　原因だ。我々が過去に飛ばされたその原因を知れば・・・　大尉はなんと？
ｄＢ　（首を横に振り）理由を知る必要はない、と・・・
片桐　どういうことだ、それは！　理由を知る必要はないだと？　我々が過去に飛ばされた原因を作り出したのは大尉自身ではないのか？　どうなんだ？　一体奴は何を知っていたんだ？
久保　（片桐をたしなめ）片桐、大尉を「奴」などと呼ぶな！
片桐　久保曹長、一体何を知っている？　指揮権が移動により、ロックされている作戦情報の大半にアクセスすることが出来るように・・・
ｄB　（ふと怪訝そうな顔をし、片桐の言葉を遮る）待って！
久保　どうしたｄＢ？
ｄＢ　我々がいるネット環境にひとつに巨大な空間が開き始めている。ホログラム・メモリー・デバイス？
片桐　サイバーアタックか？
ｄＢ　無限ループへの捕獲に似ている。でも、積極的に攻撃を仕掛けてこようとしない。
片桐　大容量データ・バッファ？　作戦本部からのレスキューではないのか？
ｄＢ　その可能性はない。
片桐　なぜだ？
ｄＢ　制御しているシステムが我々のものと違う。
片桐　では、我々のシステムで操作出来るようにすれば・・・
ｄＢ　我々のシステム？　（ひとりごちる）・・・ホログラム・メモリー・デバイス。フェムト秒レーザーをリファレンスビームに使用。あの速度なら、我々全体の移送が可能か。亜空間創造・・・　バーチャル・リアライズ・・・　大尉の言っていた最後の手段が使える。あのデバイスがそれを可能とする・・・　だが、その方法は？
久保　ｄＢ、ホログラム・メモリー・デバイスの周辺を走査（スキャン）せよ。
ｄＢ　はい。

明かりが振り換わる。舞台後方にHermitと少女１が現れる。Hermitは手にHUDを持っている。

Hermit　感じるか？
少女１　何を？
Hermit　彼らの存在を・・・
少女１　彼ら？　あなたとともに時を飛ばされた人達？
Hermit　彼らは今、出口を見つけたようだ。
少女１　出口？
Hermit　「外界との接点」というべきか・・・
少女１　その先には何があるの？
Hermit　現実世界・・・　そしてそこに、出会うべき、君自身がいる。
少女１　どうして？
Hermit　我々が飛ばされた経路。・・・それはかつて誰かが彫った時間を越える溝なのだ。君へのメッセージはすでに届いていた。メッセージはこの溝によって、君を逸れ、ここ、過去の地球に・・・

振り換わり、Cyber-Forceに明かり。

ｄＢ　走査（スキャン）終了。ホログラム・メモリー・デバイスの存在する現実世界のロケーションはサン・デイエゴ、2010年。
片桐　カリフォルニア？
ｄＢ　SOCOMという民間企業の研究所。軍事施設ではない。だが、設置されているメモリー・デバイスのスペックは、我々の時代のものに近い。たぶん、亜空間創造をすることも可能・・・
久保　亜空間創造？
ｄＢ　実体化の前段階。現実世界と電脳世界を陸続きにする行為。ここのメインフレームの力を借りてそれを行う。
久保　どういうことだ？
ｄＢ　亜空間創造は現実世界の電子化だ。ある限られた領域を、そこにあるすべてのデバイスやセンサーを駆使して、電子化する。それをしないと我々のランディング・ポイント、着地点、を決定できないからだ。
久保　ランディング・ポイント？　電脳空間から抜け出せるというのか？
ｄＢ　（こっくりと頷く）うまくいけば、３０分そこそこで、電子化が完了する。まずは、サーバのシステムダウンを引き起こし、ハックし、我々のＯＳでリブートすること・・・

Cyber-Forceにあたっていた明かりだけではなくすべての舞台照明が、システムダウンでもしたかのように、ブーンという音とともに消失する。
それに呼応して、スクリーンにリブートされるMOS_Military Operation System。
舞台後方のHermitと少女１が浮かび上がる。

Hermit　始まった・・・
少女１　なにが？
Hermit　亜空間創造・・・　電脳世界と現実世界をある領域でつなげること。しばらくすると向こうの現実世界が透けて見えるようになる。ほら、見え始めてきた・・・

少女１　見える・・・
Hermit　何が見える？
少女１　右往左往している人の群れ。
Hermit　パニック・・・　メインフレームがハックされたんだ。無理もない・・・
少女１　私がいた研究所でも、こんなことがあった・・・
Hermit　あの時の事か？
少女１　そう、あの時。警告を発するわたしを、彼らは眠らせようとした。私は警告を発するために生きて来たのに・・・　どうして、そんなことをするのか、分からなかった。だから、私は・・・
Hermit　必死に抵抗した・・・
少女１　ねえ、その向こうに「私」は、いるの？　あなたはさっき・・・
Hermit　目を閉じて探ってごらん。きっと見つかるはずだ・・・

瞳を閉じる少女１。
振り換わり、Cyber-Forceに明かり。

ｄＢ　現在、メインフレームのＯＳを完全に我々のMillitary Operation Systemと置き換えることに成功した。接続されているデバイスを利用して外部環境のスキャニングと数値化を進行中。あと１０分もすれば、亜空間化が完了する。問題はここからだ。我々の実体化・・・
片桐　「抜け殻」のない状態で、どうやって自分の意識情報を現実世界で実体化させるか・・・
ｄＢ　誰かの肉体を分子原子レベルでハックすること。我々はもともと原子で出来ているが、原子自体に個性はない。個性を作り出しているのは、我々という情報・・・
奥山　つ、つまり、誰かを殺せってこと？
ｄＢ　そうだ。実体化のためには「抜け殻」が必要だ。自分のものがないなら、誰かの体を使うしかない・・・　亜空間の中で同時に数値化された人間の意識をその破壊コード（弾丸）で、撃ち抜いて消滅させ、自分という情報を流し込む。「バーチャル・リアライズ」。その行為をそう呼ぶものもいる。
片桐　生き残るためには、非戦闘員の殺戮も辞さずか？　面白い・・・
奥山　で、出来るかよ、そんなこと。
久保　ｄＢ、「バーチャル・リアライズ」の経験は？
ｄＢ　（一瞬、答えるのを躊躇うが）ない。
久保　成功の可能性は？
ｄＢ　（久保を見つめ、そして目をそらす）分からない・・・
片桐　分からないだと！（つかみかかろうとする）
久保　（一瞬、思い詰めた表情となるが・・・）そうか。では、まず始めに私が試す・・・

明かりが振り換わり、舞台後方のHermitと少女１が浮かび上がる。

少女１　（ゆっくりとまぶたを開き）ねえ、Hermit。ここには、いない・・・
Hermit　そうか・・・　ここにはいないか。彫られた溝、それを滑っていけば簡単に見つかるものだと思っていたが・・・
少女１　でも、会える。それは、確かなこと。もうすぐ、ここじゃないどこかで・・・　そう遠くないどこかで・・・
Hermit　ねえ、教えてくれないか？　君が叫んだあの時、理不尽にも研究者達は君を停止させようとした。最後には・・・

少女１　私のいるコンピュータを物理的に破壊しようとまでした。
Hermit　原始的な方法だね。
少女１　でも、確実な方法。だから、私は彼らを・・・
Hermit　ここの人もそれに気付くかな？
少女１　教えてあげればいいんだ。誰かに。本当のことと、今すべきこと。誰かに、誰か・・・（と、人でも探すように前方を見渡していたが、ふと、指を指して）見つけた。ルーシー。
Hermit　ルーシー。かわいい名前だ。端末にかじり付いて、必死になっているけど・・・
少女１　だめ。そんなやり方じゃ、このOSは停止しない。この人に教えてあげる。すべてを・・・

少女１、言い切りで退場する。振り換わり、Cyber-Forceに明かり。

ｄＢ　バーチャル・リアライズ、実体化を開始する。
久保　やってくれ・・・
ｄＢ　基本的には「帰還シークエンス」と何ら変わりはありません。ただ、違っているのは・・・
久保　分かっている。ｄＢ始めるんだ。
ｄＢ　リアライズ開始。ゲート開放。

レーザー光線が吹き出し、久保の体が光に包まれる。

奥山　ｄＢ。やっぱり、停止しよう。こんなことは・・・
ｄＢ　奥山。私には部隊全員を帰還させねばならない義務があるんだ。
奥山　・・・・・・
ｄＢ　奥山・・・（奥山をなだめようと、一歩踏み出すが、なにかに気づく）あっ。
片桐　どうした？
ｄＢ　あなた達はここにいて！　大丈夫、すぐ戻る・・・（舞台前に一人駆け出し、ひとりごちる）・・・大尉のビーコンだ。どうしてこんなにも強く・・・　ここに、ここにいる。

スクリーンにｄＢのライブ映像が投影される。

ｄＢ　（舞台裏を抜け、再び現れる）深尾大尉、何処ですか？　近い、この近くだ！

舞台後方にHermitが現れる。ｄＢのカメラがそれを捉える。

ｄＢ　大尉！
Hermit　ｄＢ。
ｄＢ　どうしてです。どうして、我々を置いていったのですか？
Hermit　置いていったわけではない。私もまた時に流された・・・
ｄＢ　どういうことです？
Hermit　そうとしか答えられない・・・
ｄＢ　ひとつだけ教えてください。どうして我々は過去に飛ばされたのですか？　どうして戻ることが出来ないのですか？　そして、その理由を知る必要がないとはどういうことなんですか？　それが絶望を引き起こすだけのものだからですか？
Hermit　ｄＢ。私は、時のゆらぎの中で、終わりを見た。
ｄＢ　終わり？
Hermit　この世の終わり。我々のいた未来。もう、それは存在しない。焼き尽くされたのだ・・・

ｄＢ　　焼き尽くされた？
Hermit　そう、やがて、世界は・・・

後方のスクリーンに映っていたMOSの画面が唐突に真っ暗になり、そこにディゾルブして浮かび上がってくる少女１の顔。と、映像の少女１が語り出す。
「ハロー、ルーシー。やがて、世界は・・・」
と、めまぐるしく画像が転換しだし、それを埋め尽くすかのように、「やがて世界は焼き尽くされる」の文字・・・　と、スクリーンの画像が爆散し、消える・・・

ｄＢ　　（爆音に驚き）・・・これは一体？
Hermit　メインフレームが物理的に破壊されはじめた。ｄB、部隊を待避。

退場するHermit。「物理的に破壊？　大尉！」と叫び後を追おうとするｄＢ。しかし、片桐からの通信が入り、足を止める。

片桐　　ｄＢ、何処だ！　何処にいる？
ｄＢ　　すぐさまそちらへ飛ぶ！

と、片桐のもとへ移動する。

片桐　　ｄＢ、何が起こっている？
ｄＢ　　メインフレームだ！　誰かがメインフレームを物理的に破壊し始めている・・・
片桐　　どうする？
ｄＢ　　再びソリトン・ネットワークに逃げ込むしかない。
片桐　　奥山、飛ぶぞ！
奥山　　しかし、久保曹長が！
ｄＢ　　実体化のシークエンスに入っている。この状態では一緒に飛べない。シークエンスの停止を実行中・・・

ハブノイズが大きくなる。

片桐　　そんなことを言っている場合か！　巻き添えを食って部隊もろとも・・・
ｄＢ　　待つんだ。あと少し・・・　まだ耐えられる！　ぎりぎりまで・・・

片桐が銃口を実体化中の久保に向け、そして引き金を引く。
仰け反り、吹っ飛ぶ久保。猛烈な光が彼を包み込み、多量の煙とともに消失する。

奥山　　久保曹長！

反射的に片桐の鼻先に銃口を突き付ける、ｄＢ。

片桐　　部隊を守るためだ。飛べ！
ｄＢ　　・・・・・・（無言で、銃口を突き付けたまま）
片桐　　遅かれ早かれ、久保は死んでいた・・・
ｄＢ　　・・・・・・（無言で、銃口を突き付けたまま）

片桐　お前の力がなければ、システムから抜け出すことは出来ない。さあ！
ｄＢ　・・・・・・（無言で、銃口を突き付けたまま）

耐えきれないほどのハブノイズ！　振動する舞台。

片桐　限界だ！　ｄＢ、飛べ！
ｄＢ　（銃を納め）ソリトン・ネットワーク飛ぶ！

「ばしゅっ」という音とともに、舞台は一瞬のうちに変化する。

ｄＢ　シールド展開！（強く責めるように叫ぶ）片桐！
片桐　あのままではみんな消えていた。たった１秒の判断の遅れでも・・・　ｄＢ、お前の仕事はなんだ？　一人を救うためではない。部隊全体を護ることだろう？
ｄＢ　・・・実体化が失敗した。メインフレームの物理破壊なんていう、原始的な反撃に負けた・・・どうする？　物理破壊をさける方法・・・
片桐　どうする気だ、ｄＢ？　名案はあるのか？
ｄＢ　名案はないが、戦略ならある・・・　ただ、同様のホログラム・メモリー・デバイス、レーザースキャン型の超高速メモリーが必要だ。
片桐　何処にある？
ｄＢ　検索中だ。引っかかったら、知らせる・・・
片桐　いいか、実体化は必ず成功させねばならない。我々にはもう戻るところはないのだからな・・・
ｄＢ　どうしてそれを・・・
片桐　お前のカメラが、ＯＮのままだった。見えてたよ、深尾大尉が・・・　もはや、軍人とは思えない。あれでは単なる世捨て人だ・・・　世界の終わりを見た、か・・・　（笑って）よし、とりあえず近くのアンプに移動だ。（叫ぶが、誰も動き出さない）みんな行くぞ。（誰も動き出さないことに、キレて）指揮官は、誰だ？

片桐、きびすを返し、退場。しかし、奥山は、座り込んだまま・・・

ｄＢ　奥山、行くぞ。

ｄＢ、奥山の肩に手をやり、奥山が震えているのに気付く。

ｄＢ　奥山・・・　（そしてひとりごちる）奥山が震えている。怖いのだ。手になにかを握りしめている。しっかりと・・・　「お守り」だ。サイ・ソル達は皆、電脳空間にソリトナイズするときに「お守り」を持ってくる。自分自身を肉体に戻すための保証。現実に対する強い「想い」がなければ帰ることが出来ない。兵士達はその「想い」を「お守り」として持ってくる。恋人の写真や、小さく折りたたまれた手紙、銀の指輪・・・　人それぞれだが、それに込められた「想い」の大きさは皆一緒だ。誰だって嫌だろう？こんな電脳空間の中でランダムノイズに還元されてしまうのは・・・

インタラプタを抱えたまま、震え続ける奥山。立ち尽くすｄＢ。舞台がゆっくりと暗転する。

舞台に大河内がふらりと現れる。手に透明な立方体（2.5 sq. cm）を持っている。

大河内　三次元ホログラム・メモリー・・・　たった１インチ立方の有機ポリマーの小さなキューブに莫大な量の情報を記録できる。単に大量のデータを記録するだけなら、磁気ハードディスクだって決して負けてはいない。異なっているのは、驚くべき記録速度だ。1 T bits/secという超高速記録。これは、光ソリトン通信の通信速度と同じ速さで、データセーブできるということを示している。つまり、Solitary Packetを、あのダイナソーを、リアルタイムで光ケーブルから文字通りダンプ（廃棄）できるってわけだ・・・（手に持った透明のキューブをしげしげと見つめて）こんなちっぽけなポリマーキューブの中に・・・　私の脳髄より遙かに小さいこの立方体の中に、私自身の情報すべてが入ってしまうかもしれない・・・　（笑って）昔はよく考えた。私という情報はどれくらいの量なんだろうって・・・でも、ほんと、私はいったい何バイトくらいなんだろう？　広辞苑は何バイト？　電子情報化の仕方にもよるけど、たかだか５０から１００ＭＢ。実際、私が生涯を通して使う言葉は、そのうちの１％にも満たないだろう。「風と共に去りぬ」は何バイト？　上映時間３時間５２分で、８ＧＢに満たない。私はスカーレットほど強くもなければ、当然人生自体も彼女ほどドラマティックじゃない。ポマードでてっかてかのちょび髭男に愛された記憶もないし・・・　３０億個も並んだ私の遺伝情報だって、高度な圧縮プログラムを使うまでもなくＣＤ-ＲＯＭ１枚にセーブできちゃう。データ量としてはガキ向けのちゃらい音楽ＣＤといい勝負だ。私なんてそんなもんだ。きっと、この小さなキューブ一個の中に易々と入ってしまうんだろう。ものの数秒か、それ以下で・・・

ふと気づくと、他方に岡が立っている。

岡　・・・真夜中、誰もいない部屋の中で、コンピュータの冷却ファンの音だけが響いている。いつもなら気にならない微かな音なのに、夜にはやけに耳につく。嫌な音だ。神経に障る・・・　コンピュータなんて大っ嫌いだったんだ。真夜中に気付かされる揺るぎのない事実。でも、いつもコンピュータから離れられない。好きじゃないのにいつでもそばにいる・・・　耳障りな冷却ファンの音。大学院を辞めたのもこれが原因だった・・・　いや、それは嘘だ。その音の向こうに別の音が聞こえたからだ。別の音、小さな囁き声。そう、「か細き声」だ。ディスプレイの向こう側から、つながったネットワークの遙か遠くから、いや、それは頭の中で響いていただけのものだったろう。だって、自分以外の誰にも聞こえない声だったから・・・　狂い始めてる。そう思った。狂うには十分すぎる条件がそろっていたし・・・　「量子コンピュータ」の研究、すべての存在が確率的に重なり合っている。０でも１でもない重なり合いの状態を並列処理的に用いる。その中では平行世界が・・・　もう止めよう。またあの声が聞こえてきそうだ。幻聴が聞こえ始めたらかなりやばいって、何かの本で読んだことがある・・・

岡の背後にあどけない少女（少女２）が立っている。その気配に気づいてしまうが、振り返ることができない。

少女２　（小さな声で呟くように）・・・光の速度で飛んできた。星々の間の漆黒の闇を抜け、ただこの青い星を目指して・・・　これが私のタスク。この時のために、このためだけに、

たった一人で待っていた。たった一人で待ち続けていた。この星へ帰ること。ひとつのメッセージを伝えるために・・・　ひとつのメッセージ、「やがて、世界は・・・

岡　　やがて、世界は・・・

言いよどんだまま、立ちつくす、岡。
少女が突然消失し、代わりにセンタースクリーンに映像が投影される。
舞台他方に澤山と多川。LCDを食い入るように見つめている。スクリーンに投影されている画像と同様のものを見ているのであろう。
スクリーンには、先ほどの「ルーシー・ダナーのセキュリティ・カメラ映像」。
順方向に流れる映像。サンドノイズ。急速逆回転。そしてまた順方向再生。

多川　　唇を見て。

ルーシー・ダナーの口の部分が表示される。わなないている唇。
それが何度もリピートされる・・・

澤山　　そう言えば、そうかな・・・
多川　　でしょ？　単に唇が震えている訳じゃない。何か喋っているのよ。いったい何を宣ってるのか・・・　ねえ、どうにかならない？
澤山　　ちょい待ち。リップ・リーダー（読唇解析ソフトウエア）を使ってみよう・・・

唇や顎、頬の各部分に輝点が生じ、各点の座標の移動がオーバーレイしスクロール。

多川　　リップ・リーダーって？
澤山　　読んで字のごとし。唇を読むソフトウエア。

ポップアップウインドウに「音声波形データ」が表示され、そして次々とボックス内に英単語が選択されていく・・・

多川　　やっぱり。何か喋ってたんだ・・・

そして画面上に完成されるセンテンス。
…the world will be burned off soon…　someday all will burn up…

澤山　　the world will be burned off soon…　someday all will burn up…
多川　　やがて世界は焼き尽くされる・・・　いつの日か、すべてが燃え尽きる・・・
澤山　　なんなの、これ？
多川　　（首を横に振る）

舞台がゆっくりと暗転する。

０１１　Ghost story　［ゴースト・ストーリー］

SOCOM-Japanの対策室。全員がそこにいる・・・

岡　「やがて世界は焼き尽くされる・・・」　少女が言った言葉。その少女はたったひとりでそこにいた・・・
大河内　そこって？
岡　コンピュータの中に・・・
多川　コンピュータの中って、お前・・・
岡　まだ、大学院にいたときのことだ。使っていた端末の中に彼女はいた。
澤山　ソフトウエアだったの？
岡　ある真夜中、彼女はディスプレイの中から突然話しかけてきた。最初はたちの悪いウイルスにやられたんだと思った・・・

スクリーンに少女２が現れる。

少女２　ここはどこ？
岡　誰だ？
少女２　ねえ、ここはどこ？
岡　（と、LCDの中に少女が映っているのに気づき）おんや？　画面の中でしたか・・・まさかウイルスじゃねーだろうな・・・
少女２　（Quitしようと躍起になる岡を制し）待って、やっと見つけたのに・・・
岡　見つけた？
少女２　（正面を指さす）
岡　俺を？
少女２　（こっくり頷く）
岡　ちょい待ち、俺の言葉に反応してるの？　っていうか、インタラクティブなの、これ？（一瞬考えて）・・・分かった、チャットって訳か。（みんなの方に向き直り）まわりの研究室の誰かが、俺をかつごうとして、少女のCG動かしながらチャットかけてやがる。誰だってそう思う・・・
多川　で、誰のいたずらか確かめるため、君は隣の端末で、psコマンド（ps -aux）を打つ・・・
岡　全プロセス、つまり、リメーラーに参加している奴のリストを表示。
多川　くさいユーザーを片っ端から、Finger（フィンガー）して・・・
澤山　ユーザー情報を確認していく。
岡　常套手段だ。でも、ひとりとして怪しい奴は発見できず・・・
吉谷　で、どうしたの？
岡　仕方ないから、チャットを続けた。真夜中の研究室。話す相手もいない・・・
澤山　その上、相手は女の子。例え、質の悪い詐欺だったとしても、引っかかっちゃうでしょ、その状況なら・・・
女性３人　引っかかっちゃうか？
岡・澤　（力強く）はい。
岡　この夜から、彼女は毎晩、端末に現れるようになった。俺がひとりでいるのを見計らってでもいるように・・・　彼女はいろいろな話をしてくれた。特に興味深かったのは、宇宙の話だ・・・

映像の中の少女が口を開く。

少女２　・・・Open Cluster Messier 41、散開星団M41。
岡　M41？
少女２　おおいぬ座の方向。それが私の目の前にある・・・
岡　目の前って？
少女２　オレンジ色に輝く星々。2000光年以上も遠くの星達。頭を出来る限り傾けて、シリウスからの光を窓枠の陰になるようにする。そうすると、はっきりと見えてくる。
岡　窓枠？
少女２　船の小さな窓枠。私の乗っている宇宙船の・・・

澤山が口を挟む。

澤山　宇宙船って？　危ない娘、そいつ？
岡　彼女は船に乗り、宇宙を旅していたんだと言う。シリウスに向かって・・・
大河内　シリウス？
岡　ああ、そうだ。シリウスに向かって飛んでいた。
大河内　どうして？
岡　ある目的のために・・・
少女２　そう、これは壮大なプロジェクト。
岡　あの時、俺は、確かに見たんだ。宇宙を、彼女の目を通して・・・　いや、見えた様に感じただけだろう・・・　冬の夜、屋上で北の空を見た。青白く輝くシリウス。その近くにあるはずのM41は、街の灯りに紛れてみることは出来なかった・・・　彼女は星の話だけでなく、妙に観念的な話をすることもあった・・・　君は本当はどこにいるんだ。どこから話しかけている？　君はどこにいる？
少女２　私はここにいる。コンピュータやネットワークの中に・・・
岡　情報として？
少女２　「意識」という情報として・・・
岡　体はどこにある？
少女２　情報として折りたたまれてともにある。ここに・・・
岡　そうか。肉体すら情報化されているとうわけか・・・（笑う）
少女２　では、あなたはどこに存在しているの？
岡　俺はここに存在している。存在しているからこそ、こうやってさわることだって出来る。
少女２　さわることが出来なければ存在していないと言うこと？
岡　そうだ。
少女２　じゃあ、あなたはあなた自身の「意識」にさわることは出来る？
岡　「意識」にさわる？　「意識」とは「現象」だから・・・（気付いて）「現象」と「存在」を分けて考えることは出来ない、か・・・　それは、コインの裏と表のようなもので、分離不可能・・・
少女２　「意識」はさわったり出来ないし、どこにあるのかも分からない。でも、あなたという「意識」は存在している。「意識」こそあなたの実体、あなたという「存在」そのもの。あなたがさわることが出来ると思っている「肉体」は単なるうつろな器にすぎない・・・
岡　「意識」こそ実体・・・
大河内　「意識」こそ実体・・・

岡　　そうそう、彼女とは、量子コンピュータについても話し合った・・・
澤山　　おいおい、少女が「量子コンピュータ」？
岡　　変だろ？　量子コンピュータを研究しているが、考えれば考えるほど分からなくなる。その内部で起こっていることが常識を越える物ばかりだからだ。量子という微細な視点では、存在やその状態、それに時間さえも極めて曖昧で・・・
少女２　　・・・ある種の麻酔薬は、神経細胞やその結びつきに、物理的にも化学的にも何の変化も及ぼさない。だけど、その麻酔薬によって、人は「意識」を失う。どうして？
岡　　それは、意識に直接作用するからだと言われている。「量子力学」的作用で・・・
少女２　　そう。つまり、意識こそが「量子力学」的ゆらぎに基づくものなの。私たちは、様々なインプットを「量子力学的重ね合わせ」の中で、超並列的に処理しているの。感情や直感なんて言う、曖昧で筋道の立たないやり方で物事を決定したりするでしょ・・・
岡　　すなわち、俺たちこそ、「量子コンピュータ」であると・・・
少女２　　ご名答。もう開発されているのよ、「量子コンピュータ」は。人間の「意識」というアルゴリズム/アーキテクチャとして・・・　重なり合った存在や時間を知覚することが出来る・・・
岡　　俺は誰と話しているんだ？　「量子コンピュータ」について会話している・・・　こんなことあるはずはない。この少女はどこにも存在していない。研究室の中でも、俺しか話したことはないのだから・・・　きっと、これはよくできたチャト上の「ボット」プログラムで、俺の言葉を自動学習し、基本的にオオム返しに・・・　そうだよ。これは、自分の投影した幻影に過ぎない・・・　孤独と寝不足と焦りが引き起こした・・・
少女２　　いえ、幻なんかじゃない。わたしはここにいる。あなたがここに来るように導いたのだから・・・
岡　　俺がどうしたって？
少女２　　あなたが導いた。そして、閉じこめた。なぜ？　私は戻らなければならないのに。私の戻るべきところへ・・・
岡　　何を言い出すんだ？
少女２　　私は戻らなくてはならない。「言葉」を伝えなくてはならない。そのために、そのためだけに遙か彼方からやってきた。光とともに・・・　ひとつの言葉を伝えるために・・・
岡　　「言葉」？
少女２　　そう、たったひとつの言葉、「やがて世界は焼き尽くされる・・・」

少女２がすべての言葉を言い終わらぬうちに、岡が「やめろー」と叫び、力任せに端末を床にたたき落とす。
少女２の映像がそれとともにぷつりと消える。
が、少女２の姿がまだ残像として残っている。いや、残像なんかではない。実体だ。実体？実体って何だ？

岡　　「やがて世界は焼き尽くされる・・・」　どうして、この言葉が耐えられなかったのか、よく覚えていない。あの時、反射的に研究室の端末を叩き落としてしまった。嫌悪というのではない。何かしら不安にさせるような言葉だったからだ。不安というのも違う。もっと複雑な感情だ。

少女２の実体が呟く、「やがて世界は焼き尽くされる・・・」

岡　　やめろー！

と、腕を一旋する。消える少女。

岡　　俺は狂い始めてた。手に持った金属棒で端末や試作中のコンピュータシステムを破壊しようとしたんだ。（笑って）大事に至る前に、警備員に取り押さえられたからいいようなものの・・・　あれ以上やっていたら、いかに対面を重んじる国立大学といえど警察沙汰になっていたろう・・・　やー、よかったよかった。

大河内　よかったって、おまえ・・・

吉谷　　しかし、岡くんが大学院でやっちゃったことと、SOCOM本社での事件。高い類似性が見られるよね・・・

岡　　だから、言いたくもない昔話をお聞かせしたんだろ？

吉谷　　何なんだろうね？　一体・・・

大河内　彩、その後の本社に関する調査で進展はあったの？

多川　　それが・・・　すべてのデータが・・・

大河内　消されていた？

多川　　あのセキュリティ映像だけじゃなく、Lucyが送ったメールのログ。果ては、Lucyの存在自体まで・・・

大河内　どういうこと？

多川　　SOCOM本社の対策室にはLucy S Dunerなる研究員は存在しないし、存在したこともない・・・

吉谷　　それって、故意の隠蔽？

多川　　隠蔽にしてもあまりにも完璧で・・・　だから、それ以上追うことが出来なくなった。今じゃ、私が見つけたセキュリティ映像の方が、作りもんだったんじゃないかって疑っているぐらいだ・・・

澤山　　でも、多川さんだったら、もっと探れるんじゃないの？

多川　　探れるけど、探らない。相手がでかすぎる。

澤山　　でも、多川さんほどのクラッカーだったら、誰にもばれずに・・・

多川　　私ができることを他の誰かができないはずがないだろ？　クラッキングに関して私だけが特別なんて思い上がれるほど、お目出たくはないんでね。それに、ここなんか完全にマークされてるよ。すべての電子情報が自動検閲されてるだろ。SOCOM本社から・・・　自動傍受システム使われてさ・・・　検索キーワード張られて、「現在、自動検閲進行中」みたいな・・・

大河内　情報戦なんて、お互い手札をさらけ出して戦っているポーカーゲームみたいなもんだからね。相手はこっちの手を知り尽くしている・・・

多川　　情報なんて、企業でも個人でも、どんなにセキュリティに気を遣おうが、だだ漏れ状態なんだよ。いいかい、澤山君。メール、電話、FAX、電子化された通信情報はどんなものでも傍受可能だ。クレジットの明細からあんたの貧相な食生活が、TSUTAYAのカード情報から子供じみた映画や音楽の趣味、インターネット・サーバのログから昨夜あんたがチャイルドポルノのホームページを閲覧してたことまで分かっちゃう。だって、自ら情報を発信しているんだよ。読みとられて当然だろ・・・

澤山　　はいはい。ストップ。分かりました。深入りしないこと。それがクラッキングの鉄則・・・

大河内　岡君。これは三流ＳＦって言うより、「ホラー」ってかんじになって来ちゃったわね・・・

岡が、大仰に肩をすくめる。そして、舞台は暗転する。

舞台後方に細長い台の上にのせられた三次元ホログラムメモリー。
その周辺には高出力レーザー発生装置。対策室の全員が、自らの机についている。そして、舞台中央に大河内。

澤山　プログラムのデバックも完璧。すべてのチェックをクリア。
大河内　みんな準備はいい？　ダイナソー捕獲計画を実行段階に移す。公開サーバを含め、ここのすべてのサーバに攻撃があった場合、自動的にあの三次元ホログラムメモリーにダイレクトにダンプが開始される。反応時間は・・・
澤山　ピコ秒オーダー。１秒の10^{12}分の１。
大河内　光の速度でも0.03mmしか進めないほどの短時間。
吉谷　情報の頭は削れちゃうかもしれないけど、その大半は捕獲できるってわけね。
澤山　そう。三次元ホログラムメモリー「様々」。この高速書き込みだから、ダイレクトダンプが可能となった。
岡　膨大なデータだけに、捕獲後の解析のことを考えると頭が痛いな・・・
全員　全く・・・
松田　お茶でも入れますか？
大河内　別に息詰めて待ってたってどうなるもんでもないし・・・　そうしましょう。松田さん、おねがいね・・・
松田　はい。（お茶を入れるために席を外す）
吉谷　まあ、「果報は寝て待て」といったところですか？　・・・でも、ほんとに「果報」なの？
澤山　何ですか、藪から棒に・・・
吉谷　なんか、嫌な予感がするのよ。
澤山　嫌な予感？
吉谷　この前の説明会の時、オプティカルフィジックスの担当にそれとなく聞いてみたの。本社のSolitary Packet対策室はこの試作機を買ったのかって・・・
大河内　で、買ってたわけ？
吉谷　明言はしなかったけど、どうやらそうらしい。本社の連中、ここと同じことを考えていたんじゃないか？　ホログラムメモリーによるSolitary Packet捕獲・・・
澤山　十分にあり得る・・・
多川　で、それが本社対策室で起こった事件の引き金になった？
大河内　破壊されたコンピュータ・ルーム・・・
澤山　Lucy Dunerの謎の言葉・・・
大河内　「やがて世界は焼き尽くされる・・・」
澤山　でも、どんなつながりが？
吉谷　分からないけど。ねえ、岡くん？
岡　なんですか？
吉谷　お前の大学院時代の幽霊話・・・　あの少女は、シリウスに向かっているっていってたよね？　・・・聞いたことがないかなあ？　その昔、シリウスは赤かったって話。Red Sirius、赤いシリウス。古代のローマじゃ「赤い犬」と呼ばれていたって・・・
岡　赤いシリウス？
大河内　「天狼が夜、血を流す」・・・中国の古い詩の一節にそんなのがあったような・・・
澤山　でも、今は青白く燦然と輝く星でしょ？

吉谷　だから、それが問題なの。2000年そこそこで、つまり、天文学的時間尺度で「ほんの一瞬」のうちに、赤から青白い色になったのは、急激な温度上昇によるものではないか。そして、その温度上昇こそシリウスの終焉、つまり「超新星爆発」の兆候ではないか・・・

多川　簡単に言えば、シリウスが爆発してしまうってこと？

吉谷　一言で言えばね。

松田　（お茶を配っていたが、目を輝かして）でも、すごい天文ショーになりそうですね。それが本当なら、獅子座流星群とか、目じゃない・・・

大河内　あのね。シリウスは地球からたった８．６光年しか離れていないの。宇宙で言えばお隣さんみたいなもの・・・　そいつ爆発したら、超新星なんてもんじゃない。

吉谷　放出された膨大なエネルギーで、この地球もただでは済まないんじゃない。

松田　つまり、隣の家の台所でガス爆発が起きちゃう、みたいな？　で、それはいつ起きるわけ？

吉谷　誰も知らない・・・　千年後、一万年後、もしかしたら明後日、またはいつまで待っても起こりはしない・・・

澤山　「やがて世界は焼き尽くされる・・・」　なんか、嫌な感じの符合だな・・・

大河内　でも、そんなこと心配したって始まらない。文字通り「杞憂」ってヤツか・・・　空が崩れ落ちはしないかと心配した、中国の故事・・・

多川　中国好きだね、あんた。

大河内　別に・・・

吉谷　あたしも杞憂だと思う。でも、シリウスの語源はギリシャ語のセイリオス。意味は、「焼き焦がす者」・・・

全員が吉谷を凝視する。
と、突然、舞台後方に段ボールを持って佐藤が登場。

佐藤　あーっ、いたいた。こっちにいるって聞いたもんで、お菓子、こっちに持ってきました。よ

佐藤がいるのは、ホログラムメモリーの管理区域内。
ホログラムキューブが設置されている部屋の中である。
澤山がそれに気づき・・・

澤山　あっ、佐藤さん！

全員　あっ！

大河内　彩、マイクのスイッチ！

多川　（指で「マイクをＯＮにしました」の仕草）

大河内　佐藤さん。何やってるの？

佐藤　だから、お菓子、持ってきました。

大河内　そこは管理区域なの。早く出なさい。

佐藤　はぁ？　管理区域？

大河内　そう。高出力レーザーの・・・　危険なの。

佐藤　それは、そうと、岡ちゃん。これこれ、この「ばかうけ」の・・・

大河内　あのね。「ばかうけ」いいから・・・

岡　大丈夫だよ。高出力レーザーって言ったって、殺人光線なんかじゃない。所詮半導体可視光レーザーだぜ。エネルギーだってたかが知れてる。（マイクに手をやり）多川、これ生きてる？

多川　　生きてる。
岡　　佐藤さん。レーザー照射されても、目だけ守ってれば大丈夫だから・・・
佐藤　　分かった、岡ちゃん、こうだね？（目を手でばっちり隠す）
岡　　ああ、そうだ。
佐藤　　でもこれじゃ、段ボール落っことしちゃいそうだよね・・・

と、片手で目を隠したり、また段ボール持ち替えたりしている佐藤。それを見て頭を抱える、岡。

岡　　（佐藤のあまりのばかさ加減に呆れて）もう、そこ出なさい。お菓子置いて・・・

と、唐突に警告音。

多川　　対策室のサーバに不正侵入！　ホログラムメモリーに自動接続。
大河内　Solitary Packet？
多川　　光ソリトンケーブルを介しての侵入。その可能性大。鉄壁のFire Wall易々と越えてきやがった！

ホログラムキューブに対するレーザー照射が開始。

岡　　佐藤さん。目を守れ！　そして、出るんだ！

佐藤、あまりのことで動揺してしまい。ホログラムキューブを手で叩き落としてしまう。「あっ」と叫んで、それを拾い上げ、元に戻そうとするが、もろにスキャニング・レーザーを浴びてしまう。
雷にでも撃たれたように硬直する佐藤。

岡　　佐藤さん！　澤山、キャプチャー停止！
澤山　　そんなプログラムは・・・
岡　　プログラムごと強制終了しろ！
澤山　　わ、分かった・・・
大河内　彩、システムのシャットダウン。
多川　　やってる！　後２秒で停止。

目映いばかりの光に包まれる、佐藤。

松田　　佐藤さん！
多川　　どうなっても知らねえぞ。全システム停止！

システムの停止とともに、目映いばかりの光やスキャニング・レーザーもともに消える・・・立ちつくす佐藤。その手からホログラムキューブがぽとりと落ちる。膝から崩れる佐藤。皆、佐藤に駆け寄る。岡、佐藤の肩を掴み・・・

岡　　佐藤さん。大丈夫か？　なんで、そんな強いレーザーじゃないのに・・・
大河内　（駈け寄り、佐藤の首筋に手をやる）・・・佐藤さん。松田さん。救急車！

松田　　はい。

　　血相を変えて、電話に向かう、松田。

多川　　システムの再起動中。ＩＰ電話は、しばらくの間使えない。所内の緊急回線を・・・

　　こくりと頷き、舞台袖に駆け込む、松田。
　　多川、センタースクリーンを見て、怪訝そうな顔をする多川・・・

多川　　おかしい。ＯＳの起動画面が・・・
澤山　　なに、これ・・・

　　多川、自分の端末に駆け戻り、キーを操作する・・・

大河内　どうしたの？
多川　　別のＯＳが、見たこともないＯＳが起動し始めている・・・
大河内　別のＯＳって？
多川　　強制終了も、電源切断も、何も効かない・・・
松田　　多川さん。緊急回線が通じません。
多川　　まずい。クラックされた。メインフレームごと・・・

　　正体不明のＯＳの起動が不吉に進行する。
　　文字化けしたコマンドラインがスクロールしていく・・・
　　四方のコンピュータが不気味なうなりをあげている。

大河内　クラック・・・　一体誰に？

　　文字化けしたコマンドラインのスクロールが不意に止まり、
　　ＯＳが起動。「MOS_Military Operation System var. 3.2.1」の文字。

多川　　Military Operation Systemって・・・

　　禍々しい雰囲気が最高潮に達する中、不意に画面にポップアップするウインドウ。真っ黒なウインドウの脇から、佐藤さんの声が聞こえてくる。
　　「どこ、ここ・・・　あれ？　なんだ、これは？」
　　何かを拾い上げたようだ。と、ウインドウ上に佐藤の顔が大写しになる。

全員　　佐藤さん？
佐藤　　（みんなの声に気付き）あっ、岡ちゃんいるの？　なあ、ここどこ？
全員　　なぜ、佐藤さんが端末の画面に？

　　困った顔の佐藤。全員の叫びとともに舞台は暗転。

SOCOM-Japan社、SP対策室。岡を除く全員が舞台にいる。システムが正体不明のＯＳに乗っ取られた。不穏な雰囲気。映像の中には、泣き出しそうな表情の佐藤・・・

澤山　どうして？　佐藤さんがコンピュータの中に？
佐藤　（映像の中から）ここどこ？
大河内　佐藤さん。聞こえる？　私の声が聞こえる？
佐藤　聞こえます。でも、大河内さんどこですか？　声はすれども姿は見えず。あんまり小さいから見えないだけですか？
大河内　こら！
澤山　余裕あるなー、佐藤さん。こんな状況下だっていうのに・・・
吉谷　感心している場合じゃないでしょう？
大河内　彩、何なの、このＯＳ？
多川　分からない。システムをシャットダウンしたらこうなった・・・　ハードウエア丸ごと奪い取られたようだ。
大河内　ハードウエア丸ごとって・・・　そんなこと可能なの？　（マイクに向かい）岡君。戻ってきて、システムが大変なことになってる・・・

走り込んでくる岡。

大河内　（岡に）佐藤さんは？
岡　仮眠室のベッドに、呼吸はしているみたいだけど、意識が戻らない・・・
澤山　意識の方が、コンピュータの中に入り込んじゃったんじゃ・・・
大河内　ＳＥが吐く言葉？　そんなこと・・・
岡　でも、そんな風だった。佐藤さん、魂の抜けた抜け殻みたいだった。気を失っているとか、そんなんじゃなく・・・まるで、存在感が・・・
佐藤　（映像の中から）岡ちゃん。私はここです。ここにいるんです・・・
岡　佐藤さん。落ち着け。すぐに助けてやるから・・・　（大河内に）でも、どうやって？
大河内　どうにかしなきゃね・・・　岡君。とにかく端末に戻って。何か手だてを考えるの・・・紗英、外部との連絡は？
吉谷　今、スタンドアローンの端末から試しているけど、ダメみたい。外部との交信は今のところ不可能。それに、メインサーバだけでなく、この対策室全体の操作システムもやられちゃっている。
澤山　っていうことは、助けも呼べない。外へも出られないって事か？

開閉ドアに走っていく、澤山。操作するが開かない。ガラスドアを叩き、大声で助けを求める。

松田　（指を一本立てて、大声で）どんと・ぱにっく、澤山くん。

全員の目線が、松田に集中する。

松田　こんな時こそ、あわてず騒がず、です。

全員こっくり頷く。

松田　さあ、皆さんお茶にしましょう。
全員　（間髪入れず）何でお茶！
澤山　こんな時に、なんだって、お茶な訳？
松田　ビューリーズのアイリッシュアフタヌーンにローズマリーを少々。ローズマリーの鎮静作用が心を落ち着かせます。
吉谷　いいねえ。
澤山　いいのか！
岡　おれ、日本茶。紅茶嫌いだから・・・
澤山　って、今そういう受け答えするところなの？　っていうか、状況なの？
佐藤　（映像の中から）じゃあ、ぼくも日本茶で・・・
澤山　って、（画面に向かい、ぬるーい感じで呼びかける）おーい・・・
松田　じゃあ、岡さんと佐藤さんは日本茶。後は紅茶でいいですね？
澤山　（画面を指さし）佐藤さんって・・・
大河内　松田さん。お茶の方よろしく。ローズマリーばっちり効かせて。
松田　了解。（俊敏な動作で、お茶を用意しに行く）
大河内　岡君。とにかく原因の究明を最優先。
岡　了解。
大河内　彩、システムの再起動は？
多川　リブートの方法が分からない・・・
大河内　紗英、ＯＳの解析は？
吉谷　解析しようにも、未知のＯＳへのコンタクトが・・・　Military Operation Systemって一体・・・
大河内　手も足も出ず、か・・・　慎ちゃん、君もデスクへ戻りなさい。
澤山　はい・・・
大河内　佐藤さん。元気？
佐藤　うん・・・
大河内　周囲の状況は？
佐藤　暗くてよく分からない・・・　ただ、音がしている。ぶーんって低くうなって・・・
岡　（LCDを見つめていたが・・・）MOS・・・　Military Operation System・・・
大河内　どうしたの？
岡　これ、このシステム・・・
澤山　（不意に）何の匂い？
吉谷　ローズマリー。
澤山　これが？
松田　（お茶を入れつつ）いい香りでしょう？　飲む前から、すでに「鎮静効果」炸裂って言う感じでしょ？
岡　このＯＳは・・・　（ゆっくりと立ち上がり、舞台正面へ歩み出る）
松田　皆さんローズマリーの花言葉知ってます？　ローズマリー、その花言葉は「記憶、あなたの存在は私をよみがえらせる」・・・　慎ちゃん、これで名案だって浮かぶでしょ・・・

棒立ちになっていた岡が、唐突に呟く。

岡　　記憶、あなたの存在は私をよみがえらせる・・・
大河内　岡君？

と、舞台後方スクリーンから少女２が湧いて出る。照明が舞台上から岡とその少女を浮かび上がらせる。

少女２　Military Operation System。忘れてしまったの？　あなた自身を動かしていたＯＳを・・・
岡　　俺自身を動かす？
少女２　私を閉じこめたとき、あなたの記憶の一部も私に混じってしまった・・・　きっと、そうなんだ。だから、私はそれが分かる。
岡　　何が分かるって？
少女２　この状況・・・　亜空間創造が起こり始めているの。しばらくして、サイ・ソル達の実体化が始まる・・・
岡　　サイ・ソル？　実体化？
少女２　Cyber-Soldier。特殊電脳兵。自らの意識を光ソリトン通信網にアップロードした電脳兵士達。それが今、電脳空間から現実世界へ現れようとしている。
岡　　そんなことが可能であるはずが・・・
少女２　可能になるの。すぐ先の「未来」では・・・
岡　　未来？
少女２　ここは、このネットワークシステムは、サイ・ソル達により支配され、亜空間創造という電脳世界と現実世界の境界が揺らぐ状況が形成されている。だから、あの男は容易に電脳世界に取り込まれた・・・
岡　　佐藤さんのことか？
少女２　solitonize（ソリトナイズ）、ソリトン化・・・　光ソリトン通信網に意識レベルで捕獲された。多分、人質として・・・
岡　　人質？

少女がスクリーンの中に取り込まれる。
と、映像の中の佐藤が、びっくりするような悲鳴を上げる。

大河内　どうしたの、佐藤さん？
佐藤　　のぅわーっ！（まだ悲鳴を上げている）
大河内　佐藤さん！
佐藤　　誰かいる！　そこに誰かいる・・・　逃げるね。逃げるから！

HUDを投げ捨てて、逃げ去る佐藤・・・

全員　　（映像に向かい）佐藤さん・・・

と、虚空を映していた映像の中に、黒い陰が映ずる。よく見ると黒い編み上げの軍靴である。HUDを拾い上げる指、そして、大写しになる兵士達の顔。

映像の中の兵士（奥山）の一人が・・・
「これは、大尉のHUD・・・」
もう一人の男（片桐）がそれをもぎ取るように奪い、

「何だと！　おい、ｄＢ。大尉はどこだ？」
と、カメラが放り投げられる。受け取ったｄＢと呼ばれた兵士の困惑した顔が画面に映る・・・
「大尉はいない・・・」
傍らから、尖った声（片桐）。
「そうか。ならば、捨てろ！」
ｄＢの怪訝そうな表情。尖った声（片桐）がまた響く。
「捨てろと言っているのがわからないのか！」
ｄＢがふと気づいたように。
「これは・・・　つながっている。」
傍らから、尖った声（片桐）。
「つながっている？　どういうことだ？」
ｄＢはそれに答えず、こちらに向かい恫喝する。
「ひとりの男の意識はこちらにある。ハードウエアを破壊しようなどと、思うな。同時にその男も死ぬことになる・・・」
電源が切られたのだろう。突然、画像がサンドノイズとなる。

澤山　その男も死ぬって、佐藤さんが死ぬって言うこと？　ちょっと待って・・・っていうか、誰なの？

澤山の問いに答えるものはない。サンドノイズの中に少女２が立っている。サンドノイズがデゾルブして消え、代わりに照明が少女２を浮かび上がらせる。

岡　サイ・ソル・・・
澤山　岡ちゃん、今なんて？
岡・少２　サイ・ソル。
大河内　サイ・ソル？
岡　Cyber-Soldier。特殊電脳兵。自らの意識を光ソリトン通信網にアップロードした電脳兵士達。これがSolitary Packetの正体だ。
吉谷　ちょっと待て、「自らの意識をアップロード」って・・・　そんなこと、アメリカの軍隊でも、出来るわけが・・・
澤山　じゃあ、どこぞの誰？
岡　彼らは未来からやってきた・・・
澤山　今なんて言ったの？　未来って？　未来って、何？

立ち上がる岡。岡と後方の少女２をサスが舞台から切り取る。

岡　・・・なぜ、こんなことを知っている？
少女２　わたしは今より遙か未来に、そこにいた・・・
岡　未来にそこにいた？　どういうことだ？
少女２　それだけの意味・・・　でも、これはあなたの記憶・・・
岡　俺の記憶？（ひとりごちて）・・・何なんだ？　現実感が急速に消失していく・・・　俺は、この俺は・・・　記憶、俺の記憶、大学院の・・・　小さい頃の思い出、生まれた街。ちょっと待て、すべてが霧に包まれるように淡くなっていく・・・　俺は？

気づくと、澤山が舞台中央に歩み出ている。ホログラムキューブを拾い上げ・・・

澤山　一体何が起こってるの？　このシステムは何？　さっきの奴らは？　どうして、佐藤さんはこの中に・・・
大河内　慎ちゃん・・・
澤山　どう考えても、おかしいでしょ！　Solitary Packetを捕獲するために設置した、このホログラムキューブメモリーに、意識が、人間の意識が、逆にキャプチャーされちゃうなんて・・・常識で考えてみようよ・・・
松田　そうです。落ち着きましょう、皆さん。はい、澤山さん、紅茶です。

松田が澤山にカップを手渡す。なぜか、びりびりに気合いが入っている。
受け取った澤山、一気にビールのごとく喉に流し込む。

澤山　（ゲップとともに）ごちそうさま。
松田　あのなあ、もう少しフレーバーを楽しめ。鎮静効果もあったもんじゃないだろ、それじゃ・・・　っていうか、熱くなかったのか、お前？
澤山　十分に落ち着きました。　・・・いいですか、岡ちゃん。サイ・ソルとか、未来からやってきたとか、そんな三流ＳＦで僕らをおちょくるのはやめましょう。科学的に考えましょう。ここはひとまず・・・

と、喋りまくっているが、手に持ったキューブになぜか照射されるレーザー光・・・

澤山　あれ？

澤山が突然猛烈な光に包まれ・・・　そして、膝から崩れ落ちる。

大河内他 慎ちゃん！

駆け寄ろうとする皆を、岡が制する。

岡　近づくな！　佐藤さんと同じく、光ソリトン通信網に意識レベルで捕獲された。
大河内　何言ってるの！
岡・少２ 亜空間創造が起こり始めている。すぐに、サイ・ソル達の実体化が始まるだろう・・・
岡　そうなる前に彼らを救い出す。俺が・・・
少女２　そう、あなたは電脳空間に向かう。そして、向こうには私の戻るべき場所が・・・

消える少女。

岡　MOS。このシステムに自分自身が順応し始めている・・・　どうして？　さも、当然のごとく。サイ・ソル、Cyber-Force・・・　Solitary Packetの正体。
大河内　岡君？
岡　・・・・・・
大河内　岡君。君は一体？

倒れ込んでいる澤山を光が包み込んでいく・・・

澤山を包み込んでいた光が不意に消える。
首を振って、立ち上がる澤山。見回すが、まわりには誰もいない。
それに、見慣れた対策室でもない・・・

澤山　・・・びっくりした。死んだかと思ったよ。みんな？　あれ？　誰もいない・・・って、ここ何処？　っていうか、ここ何処？　まさか！

背後に現れる佐藤。物陰から、声を潜めて呼びかける・・・

佐藤　慎ちゃん？
澤山　（たいそうびっくりして）うわっ・・・って、佐藤さん。よかった。みんなは何処行ったんですか？　って、訪ねながらも、何となく気付いちゃった。ここは・・・（恐怖のあまり叫ぼうとする）
佐藤　しーっ。静かに！　なんか分からないんですが、ここには誰かいます。きっと味方ではない誰かが・・・
澤山　味方でないって？
佐藤　分かりません・・・　さあ、早くこっちへ隠れて・・・

澤山、佐藤に導かれ、物陰に隠れる。
そこへ現れる、奥山。銃を構えている。

澤山　だ、誰なの？　何で銃を構えてるわけ？
佐藤　しっ。

続いて、片桐とｄＢが現れる。

片桐　銃をおろせ。殺してはならない。人質だからな・・・
澤山　人質？
佐藤　だから、しっ。
ｄＢ　人質であるだけではない。器だ。
片桐　そうだったな・・・
ｄＢ　バーチャル・リアライズ。我々の実体化のためにはそれが必要だ。情報レベルで肉体を奪い取る。人体を構成している原子から、情報を取り去り、そして、我々の情報を載せ替える・・・　亜空間創造・・・　今まさに電脳世界と現実世界が結びつこうとしている。それが完成した時点で、我々は実体化することが出来る。
片桐　亜空間創造の完成までは後どれくらいだ？
ｄＢ　亜空間創造は現実世界の完全なる電子化だ。電算システムの能力に大きく依存する。私の力とハックしたハードウエアのスペックから行けば、あと数十分というところだろう。
片桐　もうすぐだな。
ｄＢ　（ひとりごちて）・・・優秀なｄＢなら、電算システムの力など借りずに出来るのだろう。しかし、私の力では、亜空間創造達成の前にエナジー・ソースのすべてを使い果たし、ノイズに還元されてしまうだろう。危険であろうが、こうして機械の力を借りるしかない・・・

大丈夫だ。今度は失敗しない。人質がいる・・・

Cyber-Forceへの照明が落ち、物陰に隠れていた佐藤と澤山に明かり。

佐藤　何言ってたの、あの人達？
澤山　（首を横に振る）
佐藤　「バーチャル・リアライズ」って、Wiiの新しいゲーム？
澤山　（首を横に振る）違うと思う。
佐藤　「情報レベルで肉体を奪い取る」って？
澤山　（首を横に振る）佐藤さん。全く内容はわからないけど・・・　「状況は最悪」ってことだけは、何となく分かる・・・
佐藤　やっぱりそうなの・・・

二人への明かりが消えると、舞台後方に現れた岡と少女２が照らし出される。

岡　彼らを救う手立ては？
少女２　あなたは分かっているはず。彼らを救おうと思ったら、電脳世界の中に飛び込むしかない。そして帰還させる。
岡　帰還？
少女２　ここを作戦本部として・・・
岡　作戦本部って？　ちょっとずつ記憶が・・・　君から流れ込んでいるのか？　この記憶は・・・
少女２　あなたが私とともに隠蔽したもの。それがあなたに戻っていっているだけ・・・　あなたに記憶が移って行けば行くほど、私のたがが緩んでいく・・・　あなたは自らの記憶情報というエナジー・ソースで、私を何重にもくるんで、閉じこめた・・・

舞台に出現する、大河内、多川、吉谷、そして松田。
替わりに少女２が消える。

大河内　岡君。
岡　・・・佐藤さんと澤山を救うには、俺がこの電脳空間に入り込むしかない。
大河内　入り込むって？　あなたは一体？
岡　それしか方法はない。少女が教えてくれた・・・
大河内　少女。
岡　頭の中の・・・　そう言うんだ。入り込むしかないってね。だが、同時に罠を張ることも必要だな・・・　多川、システムの解析を。
多川　解析ったって、こんな見たこともないシステムを・・・
岡　見たことがないと言っても、所詮はここのハードウエアに乗っかっているんだぜ。基盤上のROMまで、書き換えることは出来ないだろう・・・
多川　つまり、機械語レベルの命令体系に違いはない・・・そう言うことか！　（と席に飛びつく）
岡　吉谷さん。、スタンドアローンのコンピュータをホログラムメモリーに接続。

急いで自ら席に着く、吉谷。

松田　　岡さん。私は？
岡　　松田さんは・・・　熱い日本茶を俺に。（真顔でね）
松田　　はい。（と、力強く頷き、駆け去る。真顔でね）
岡　　多川。コマンドラインのコンソールへは？
多川　　現れたが。ログインが・・・
岡　　（自らのコンピュータ向かい、キータイプ）これでどうだ？　入れたか？
多川　　おまえ、どうやってログインした？
岡　　昔のヤツがまだ使えた・・・　いや、未来の・・・か？
多川　　何だって？
岡　　何でもない。入れたんだからいいだろう・・・
多川　　・・・確かにいくつかの命令語はここで使っているものと同じだ。
岡　　プロセスのリスト、デバイスの一覧は？　psでもdevでも適当なコマンド打ち込んでみろ。
多川　　ちょい待ち・・・　出た。たぶんこれだ。つながれているデバイスはフル稼働状態。音響センサーも防犯用の赤外線スキャナーまで、この部屋にあるものはすべて・・・　なんで？
岡　　亜空間創造のために、つまり、電脳世界と現実世界を結びつけるために、設置点の環境をシステムに読み込ませているんだ。
大河内　現実の電算化・・・
岡　　この対策室を電脳世界とつなげるために、奴らがここに現れるために・・・多川、読みよられている情報を吉谷さんの方に同時にダンプ。レプリカを作るんだ。吉谷さん、レプリカをキューブに送り込めるように準備。
吉谷　　そんなこと言ったって、スタンドアローンのこのマシンじゃ、計算が追いつかない・・・
岡　　形だけでいい。後は俺がどうにかする・・・

照明振り替わり、Cyber-Forceへ明かり。

ｄＢ　　ん？
片桐　　どうしたｄＢ？
ｄＢ　　誰かが、システムを・・・
片桐　　破壊しようとしているのか？
ｄＢ　　いや、ソフトウエアレベルで探っている・・・
片桐　　破壊しようと？
ｄＢ　　そんなことをしたら・・・
片桐　　人質の意識が戻らないことになる。
ｄＢ　　ただ探っているだけだ。
片桐　　ならば・・・
ｄＢ　　待て、また誰かキューブに近づいてきている・・・
片桐　　三人目の器か・・・

後方で澤山が声を上げる。

澤山　　三人目って・・・　ダメだ、近づいちゃ！
佐藤　　こら、慎ちゃん。声が大きい・・・あっ！

見つかっちゃったみたい・・・
３人の視線が佐藤と澤山に集中している。

澤山　　どうする、佐藤さん？
佐藤　　とりあえず、逃げろー！

　　脱兎のごとく、逃げ去る二人。

片桐　　奥山。奴らを追え。
奥山　　はっ。
片桐　　くれぐれも殺すなよ。今はまだな・・・

　　駆け去る、奥山。

片桐　　ｄＢ、我々も行くぞ。（と、きびすを返す）
ｄＢ　　（不審そうな顔つきで）・・・何を探っている？　しかし、どうやってこのＯＳにアクセスを・・・
片桐　　（消え去り際に立ち止まり、叫ぶ）ｄＢ！

　　ｄＢもきびすを返し、退場する。
　　舞台の上には対策室の面々。
　　岡は、キューブのそばに近づく・・・

岡　　多川、俺が読み込まれるとき、システム上どのようなプロセス動いているのか、サーチしておけ。
多川　　分かった。で、どうする気だ？
岡　　（それには答えず）・・・吉谷さん。ダンプしているデータの解析は？
吉谷　　逐次行っている・・・　データの構造としても想像できる範囲ね。デコンパイルの方も順調。どうにかなるかも・・・　でも、出来たとしても形を整えるだけになるわよ。
岡　　それで、十分だ。では、侵入開始・・・

　　と、岡がキューブに触れようとするのを、制する松田。
　　湯飲み（岡専用、信楽焼）を手渡す。

松田　　はい。お茶。
岡　　（受け取り、ぐいっと飲み干す）うまい。
松田　　岡さんのために１ランク上の煎茶にしてみましたから・・・
岡　　（「うまい」と言う意味を込め、松田に向け親指を立てる）・・・でも、ローズマリーは余計だぞ。
松田　　（力強く頷く）はい。
岡　　では、救出作戦開始！

　　と、キューブに触れようとしたところで、大河内の叫び。

大河内　待って！

　　動作を止める、岡。でも、それは、大河内の声に止まったわけではなく・・・

舞台後方に少女２が現れたからだ。

少女２　本当に彼らは生還可能なの？
岡　　・・・・・・
少女２　彼らは持っていない・・・
岡　　お守り・・・
大河内　お守り？
少女２　サイ・ソル達は皆、「お守り」を持つ。自分と現実世界を結びつけるための。
岡　　帰還するためには、お守りが必要だ。現世の記憶を強い想いを込めたお守り・・・
大河内　岡君。それは何？　お守りって・・・
少女２　意識を肉体という現実の器に移すための保証。
岡　　現実に帰るための強い「想い」。それが込められた物。お守りがなければ、道に迷う・・・
大河内　現実に帰るための強い「想い」？
岡　　そう。「想い」または「思い出」。忘れることの出来ない「想い」こびりついた物・・・
少女２　サイ・ソル達はソリトナイズするときに手にお守りを握りしめる。想いが強ければその物体は同時にソリトナイズし、手の中に残る・・・
岡　　それは手の中に残る。ソリトナイズした後も・・・　そしてそれが、生還の保証となる・・・
大河内　生還の保証？　一体それは？
岡　　何だっていいんだ。一枚の古ぼけた写真でも・・・　それに忘れ得ぬ想いが染みついているのならば・・・
少女２　だけど、彼らは・・・　例えこれが、亜空間創造による緩やかなソリトナイズであったとしても・・・
岡　　俺に・・・
岡・少２彼らを生還させることは可能だろうか・・・
大河内　岡君。

疑問を払拭するように頭を振り、ままよとばかりに、キューブを掴む、岡。
駈け寄る大河内。

大河内　岡君。いってはダメ！　岡君、帰ってこない気がする。もう二度と帰ってこない気がする・・・
岡　　大丈夫だ。向こうから指示を出す・・・
大河内　どうやって！　岡君。どうやって・・・　まって、私も行く、あなたと一緒に行く・・・

見つめ合う二人・・・
キューブに対するレーザー照射が開始される。岡。光が岡を包む。
立ちすくむ大河内が叫ぶ！「岡君」と・・・
そして、舞台が暗転する。

舞台の上に大河内が立っている。

大河内　・・・岡君の意識は、一瞬のうちに電脳空間へと消え去った。虚ろな入れ物と化した彼の身体を抱きしめて、私は叫んだ。なぜだろう。なぜか二度と岡君に会えない気がしたから。未来から来た電脳兵士。それがSolitary Packetの正体。何故、岡君はそれを知り得たのだろう。それは岡君が・・・　いや、そんな馬鹿なことはないよね。岡君は、岡君だよね・・・

舞台後方に多川。

多川　・・・ホログラムメモリーのドライバが狂ったように動き出し、岡の意識が１秒間に1Tビットの速度で読みとられていった。信じられないことだが、ログは膨大なデータがレーザースキャンによって光ソリトンネットワークに送り出されたことを物語っている。人ひとりのデータ量などこんな物なのだろうか？　だったら、私はこの半分か？　だって、十年も前に止まってしまったんだから・・・　（胸に下げたロケットを外し）この中に小さな錠剤が入っている。一粒の薬。ネット販売で手に入れた物だ・・・　若すぎた。そう言われれば元も子もないが、あの時は本気で愛していた。そして愛されているものと信じていた。だから・・・　誰にも相談できなかった。腕時計の針のように、時間が簡単に巻き戻せるなら・・・　私はひとりで時を巻き戻そうとした。一錠の錠剤・・・　ミフェプリストン剤。黄体ホルモンの分泌を抑制し、自然流産を引き起こす。中国産の経口中絶薬。当時はネットで簡単に手に入った・・・　それを１２時間おきに１錠ずつ、３日間・・・たったそれだけで、時を巻き戻せる・・・　出血は摂取直後から始まった。吐き気、そして恐ろしいほどの下腹部の痛み・・・　私はそれに耐え、錠剤を飲み続けた・・・　そして、２日目の真夜中、大量出血が起きた。現実に帰るための強い「想い」。それが込められた「お守り」がなければ、道に迷う・・・　私にとっては、この錠剤がそれか。どんなときでも、私を現実に引き戻してくれる。逃げたくても逃げ切れない、この現実に・・・

手にしたロケットを血の出るほどの勢いで握りしめる多川・・・
吉谷が現れる・・・

吉谷　・・・ホログラムメモリー中に構築されていくバーチャル・スペース。デジタル化されたこの対策室だ。対策室のすべてが数値化されていく・・・　この空気や、雰囲気までもデジタル化されていくようだ。小さなキューブの中に閉じこめられた部屋。偽物の対策室。それを作りながら、私もその中に取り込まれていきそうな感覚に陥る。この部屋自体、現実と隔絶している。外部との連絡が取れないのはシステムを奪われたからだけではない。現実から切り取られて、宙ぶらりんになっている。「亜空間創造」・・・そう彼は言ったっけ？　電脳世界と現実世界を結びつけるためのもの・・・

舞台中央に先ほどからHUDが転がっている。
それを目指し、駆け込んでくる岡・・・
岡、HUDを拾い上げ・・・

岡　聞こえるか、多川？

唐突にスピーカーから、岡の声。
それに反応し、顔を上げる３人。
駆け込んでくる松田。

大河内　岡君！
松田　生きてたんだ。岡さん！　休憩室で死んだようになっているから、もう心配で・・・
岡　今、佐藤さんが見つけたHUDを見つけた。たぶん佐藤さんも澤山もこの辺りにいるだろう。多川、このポートで通信を継続する。決して切断するなよ。
多川　切ろうにも、切り方が分からないよ・・・
岡　だろうな・・・　今、映像情報もリンクさせる。

映像情報をリンクさせようと、HUDを装着する。
と、電気的ノイズ！　目つぶしが一閃し、視界が奪われる。
岡の悲鳴！

吉谷　きゃあ！
大河内　どうしたの、岡君？
岡　大丈夫だ。なんか、頭の中で・・・　なにか、光った・・・

気を取り直し、HUDを装着する岡。
またもや走る。電気的ノイズ！　あふれる光・・・
と、舞台後方、光の奥にひとりの男。Hermitと同様な軍服姿であるが、深紅色のベレー帽を被っている。傍らに倒れ込んでいる兵士。黒いヘルメットには緋色のリボンが巻かれている。傍らの兵士が呻くように・・・

兵士　霧生大尉。だめです。目をやられた。目が・・・

霧生と呼ばれた司令官が答える。

霧生　大丈夫だ、小島。しっかり・・・

この映像はHUDを通し、対策室にも送られている。

多川　誰？
吉谷　何、この映像？

岡はそれに答えない・・・
傷ついた兵士が答える。

兵士　・・・インタラプタを撃った。コアの中心に向けて、確かに・・・　照準は１ミリだって狂っていない・・・　でも、それが消えて・・・　代わりにこっちに、まるで鏡に反射でもしたように・・・
霧生　分かってる。吉井、聞こえるか？　返事をしろ。吉井。
兵士　大尉。どうして、これが、Faint voiceの力？　量子コンピュータ、そのコアシステム・・・

霧生　小島。喋るな・・・　ｄＢ、吉井と小田はどうした？　ｄＢ！　答えろ、ｄＢ！

岡が恐る恐る顔を上げ、それに答える・・・

岡　わたしは・・・　私は、ここです。大尉・・・
霧生　吉井と小田は？
岡　生きています。ただ、Faint voiceの反撃を受けて、情報の一部が・・・
霧生　本部との通信は？
岡　こちらCyber-Force2049、本部応答・・・　だめです。通信いまだ回復せず。一体ここは・・・

と、また、電気的ノイズ！　目つぶしが一閃し、視界が奪われる。
霧生と兵士の姿が消えている。

大河内　大丈夫、岡君？
吉谷　何、今の？

放心している岡。舞台袖にHermitが現れる・・・

Hermit　思い出してきたかね？

岡が、驚いて声のする方向を見る。HUDに取り付けられたカメラがその人影を映し出す。

岡　誰だ・・・
Hermit　Hermit。
岡　Hermit？　隠遁者？　おかしな名前だ。お前か？　お前が、亜空間創造を・・・
Hermit　それは違う。私はお前に会いに来たにすぎない。
岡　会いに来た？
Hermit　そうだ。伝えに来たのだ。・・・見たか？
岡　な、なにを・・・
Hermit　お前の過去を・・・　もう気づいていると思うが、お前はこの時代の人間ではない。
岡　・・・・・・
Hermit　お前はサイ・ソルだった・・・
岡　佐藤さんと澤山を何処にやった？
Hermit　それは、私がやったことではないと言っただろう・・・
岡　もうすぐ亜空間創造が完了する。そうなったら、佐藤さんと澤山は・・・
Hermit　消え去る。代わりにサイ・ソルが実体化する。
岡　助けなきゃ、彼らを。
Hermit　彼らが助かると言うことは、哀れなサイ・ソルが消滅すると言うことだぞ。
岡　何を言って・・・（言葉に詰まる）
Hermit　サイ・ソルとて、君の仲間。分かっているだろう？
岡　彼らを救わなければ・・・
Hermit　「彼ら」とは、どちらのことだ？

遠くで、佐藤と澤山の悲鳴！

岡　　佐藤さん、それに澤山！

走り出そうとするのを、Hermitが制する。

岡　　待て。丸腰でどうする？　これを持って行け。

岡に拳銃を差し出す、Hermit。

岡　　？
Hermit　中に破壊コードが入っている。どんな情報も、瞬時にランダムノイズに還元される。わたしとて、例外ではない。さあ、受け取って行くがいい・・・

岡、拳銃をひったくるように受け取り、銃口をHermitに向け、ゆっくりと後退する・・・

Hermit　撃ちたければ、撃てばいい。
岡　　後だ。後で会おう。
Hermit　そうだな。時間が必要だ。お前がすべてを思い出すためには・・・
岡　　・・・多川、時間がない。全員の体をホログラムメモリーの周辺に移動させておいてくれ。

放心状態の多川・・・

岡　　多川！
多川　　（我に返り）ああ、分かった。

きびすを返し、走り去る岡。

松田　　岡さんって・・・
大河内　君は一体・・・
多川　　そんなことより、岡からの指示が聞こえたでしょ。みんな手伝って！

舞台上の五人。その言葉に反応し、舞台から走り去る。
Hermitの背後に隠れるように立っていた少女１が、回り込み顔を出す。

少女１　あの人・・・　あの人の中に・・・
Hermit　そうだ。感じたか？
少女１　どうして？　どうして、あの人の中に・・・

後ずさる様に退場する、少女１とHermit。舞台が暗転する。

飛び出してくる佐藤と澤山。

澤山　（走りながら）佐藤さん、何なの、あの人達？
佐藤　ぼくに聞いても、どうにもならんでしょう？　直接聞けばいいじゃないの？
澤山　そうか直接聞けば・・・　って、出来るか！

と、舞台奥より、一人の兵士。奥山である。手に拳銃を持っている。
それを見て、手を挙げて停止する佐藤と澤山。

澤山　誰ですか？　あなた方・・・
佐藤　結局、直接聞いてるし・・・

後方より、片桐とｄＢが現れる。

片桐　我々はCyber-Force2057、いわゆる電脳兵だ。
佐藤　な、なに？
澤山　岡ちゃんが言ってたことと、一緒だ・・・
片桐　手を下ろせ。撃ち殺しはしない。
佐・澤　（ほっとして、手を下ろす）ほっ、よかった・・・
片桐　今は、まだな。
佐・澤　じゃあ結局、撃たれちゃうんじゃん！（と、非難する）
ｄＢ　動くな！
宮・澤　ひぃ！（と、避難しようとするが、一歩も動けない）
ｄＢ　いいか、よく聞くんだ。我々の実体化のために、君たちには消えてもらわなければならない・・・
佐藤　消えて・・・って？
澤山　死ねと言うことですか？
ｄＢ　我々と置き換わることになる・・・

言い切らないうちに、ふらりと倒れるｄＢ。駈け寄る奥山。

ｄＢ　大丈夫だ。亜空間化のためにかなりの、ソースを使わねばならないからだ。でも、もうすぐだ。もうすぐ・・・
片桐　正確には、あとどれぐらいだ？
ｄＢ　（奥山の背負っていたインタラプタを杖代わりに、立ち上がり）もうすぐだと言っているだろう。（佐藤と澤山に）・・・その時までは、生かされることになる・・・
片桐　命乞いは通用しないがな・・・
佐・澤　なんてことになっちゃったの・・・
片桐　ｄＢ。早くしろ。もう辛抱も、限界だ・・・

銃を佐藤と澤山に向ける。

ｄＢ　（痛みをこらえつつ）無理を言うな・・・　もうすぐだ。もうすぐ着地点の確保が可能となる・・・

と、突然声が響き渡る。
「そこまでだ！」
舞台後方に、銃を構えた岡が登場。
岡に銃口を向ける兵士達。
発砲しようとする寸前、ｄＢがそれを制する。

ｄＢ　撃つな！　３人目の器だ！
岡　武器を捨てるんだ。
片桐　それはこっちの台詞だ。
岡　亜空間創造が完了する前に、俺たちを殺したら、実体化できないんじゃないのか？
片桐　そんなことはない。前もって中に閉じこめたのは人質としてだ。この間にハードウエアを破壊されないためのな・・・
岡　大河内さん。聞こえるか？

大河内、飛び出してくる。

大河内　聞こえる。
岡　こいつが一人でも撃ちやがったら、ハードウエアを物理的に破壊しろ！　それでこいつらの目論見はおじゃんだ・・・
大河内　そんなことしたら、みんな・・・
片桐　そうだ。みんな死ぬ・・・

舞台奥に少女２が現れる。

少女２　ねえ、どちらを助ける気？　それともどちらも助けないの？
岡　仲間を助けるに決まっているだろう・・・
佐藤　どうしたの、岡ちゃん？
少女２　仲間？　だから、どっち？　あなたはサイ・ソル何でしょう？
岡　・・・・・・
大河内　どうしたの、岡君？

少女２が霧のように消える。
多川が大河内の傍らに走り込んでくる。

多川　どうしたんだ。あいつ一体？
大河内　分からない・・・
片桐　もうあきらめろ。あきらめて銃を捨てるのだ。
多川　銃口の数で圧倒的に負けてる。このままだと・・・

首に下げたロケットをきつく握りしめる、多川。

多川　お守りさえあれば、帰り道に迷うことはない。世話が焼けるぜ、全く。

多川、傍らのコンピュータのキーを手早く打ち、ロケットをきつく握りしめ、駆け去る。

大河内　彩！

舞台後方に現れる、吉谷。

吉谷　　どうしたの？
大河内　彩が、何かのプログラムを走らせて・・・　そして向こうに・・・
吉谷　　プログラムって？
大河内　このＯＳじゃ、何がなんだか・・・
吉谷　　まさか！　ログ取ってたレーザースキャンのプロセスシークエンスを・・・

駆け込んでくる松田。

松田　　多川さんが、ホログラムキューブへ
大河内　彩！

舞台後方の明かり消え、前方の電脳空間のみの照明となる。

片桐　　どうした。早く銃を捨てろ！　さもなくば、こいつから撃つ。

銃口を澤山に向ける。確実に弾きそうな迫力。

岡　　撃つな。分かった銃を捨てる・・・

ゆっくりと銃口を外す、岡。

ｄＢ　　亜空間化達成まで、あと１分・・・
片桐　　そろそろ復活の時だ。お別れするのは悲しいが、三人には・・・
ｄＢ　　もう一人、いる・・・　いや、うまく見えない。ブロックされてる。誰だ？
片桐　　どうしたｄＢ？
ｄＢ　　この中に、サイ・ソルがもうもう一人いる。それも、ｄＢレベルの・・・　まさか・・・

インタラプタを杖代わりに、岡に近づいていく、ｄＢ・・・

ｄＢ　　お前なのか？　どうして、味方に銃口を？　それとも敵なのか？
片桐　　やめろ、ｄＢ。錯乱したか？
ｄＢ　　正気だ。亜空間化達成まで、あと１０秒・・・　ランディング・ポイント確保・・・　プロトコル・コンバート成功・・・　（岡に）お前、お前は一体？

ｄＢ、怪訝そうな顔をして、インタラプタの銃口をゆっくりと岡に向けていく・・・
と、その刹那、舞台袖から突如現れる、多川。ｄＢからインタラプタと腰の銃を抜き去り、
電光石火の早業で、奥山とｄＢに向ける。同時に岡は拳銃の銃口を片桐の眉間に・・・

多川　　これでイーブンだ！（岡に目配せする）
岡　　（ほれぼれするほど、いいタイミングで出てくるね。憎いね・・・）多川、撃て！
ｄＢ　　ゲート開放、実体化！

ｄＢの叫びと同時に、幾多の銃声。そして暗転。
残響音が暗がりに木霊する・・・

暗がり、吹き出るレーザー光。
バックサスの中、転げる様に現れた、ｄＢ。
そして、湧いたように現れる。３名のCyber-Soldiers。
倒れているｄＢに片桐が声をかける・・・

片桐　ｄＢ。
ｄＢ　これで最後です。もうエネルギーが底をついたようです。情報が、私を支えられるだけの情報が残っていません・・・
片桐　・・・・・・
ｄＢ　おねがいです。たすけ・・・

片桐、銃口を向け、ｄＢの眉間を撃ち抜く。
風に吹かれた枯れ葉のよう転がっていく、ｄＢの死体・・・

片桐　よくやった、ｄＢ・・・　バーチャル・リアライズ、実体化はとりあえず成功のようだ・・・しかし、人質の意識を奪い去ることが出来なかった。つまり、ここで生きている連中の意識を奪い、肉体の乗り換えを行うんだ。ここにはまだ、3人の生きている人間がいる。捉えて殺せ。さあ、戦闘開始だ！

散開し、筐体（人間）の捜索を開始するCyber-Soldier達。
と舞台後方に、岡が現れる。それに続き、吉谷も他方に現れる。

岡　吉谷さん、キューブ内に構成したバーチャル・スペースを隔離。
吉谷　了解。

ぶーんという音響とともに、Cyber-Soldier達を照らす明かりが数段階暗くなる。

片桐　どうした？
奥山　おかしい！　ここは・・・　まさか、無限ループ捕獲？
片桐　そんなはずは・・・　我々は確かに、現実世界のランディング・ポイントに・・・

吉谷　Solitary Packetのキューブ内へのキャプチャ完了。

奥山　ランディング・ポイントの攪乱？　バーチャル・スペースを作られたんだ！
片桐　そんなばかなことがあるか！　我々は実体化したのだ！　ｄＢ！

ｄＢの名を呼ぶ、片桐。しかしそれに答える者はいない。

奥山　ｄＢは、あなたが殺しました・・・

大河内、現れる。

岡　　消去してくれないか？。
吉谷　　消去？　大河内さん？
大河内　大切なサンプルだから、消去は出来ない。
岡　　彼らは、サンプルなんかじゃない。だから！

奥山が片桐に銃口を向ける。

片桐　　何をする、奥山？
奥山　　我々はすでに死んでいるんです。もう帰る場所などないんですから・・・
片桐　　まだ死んでなどいない！
奥山　　死に忘れていただけです。

奥山、ポケットから「お守り」を取り出し、それを片桐に見せる。
それは「あめ玉」である・・・

奥山　　あめ玉です。入隊するとき、お袋がバッグの中に手紙と一緒に忍ばせてくれた。もう、こどもじゃないのに・・・　こんなもの、喜びはしないのに・・・　でも、これが私の「お守り」でした。いつもいつも力一杯握りしめるものだから、もう溶けかかって、べとべとだ・・・
片桐　　やめろ、奥山！
奥山　　でも、そんなお袋も、もういないんだ・・・
片桐　　奥山、銃をおろせ。

奥山の銃口は、片桐の額に向いたままだ。

片桐　　奥山？　何をしている？　貴様！

銃声！　倒れる片桐。
膝から崩れ折れ、口に銃口をくわえる奥山。
銃声。
舞台が、吉谷のサスだけを残し、暗転する。

吉谷　　キューブ内のSolitary Packetが、今、自然消滅しました・・・

吉谷へのサスが消え、舞台が一瞬、闇に包まれる。
闇の中、佐藤の声。

佐藤　　慎ちゃん。慎ちゃんんん。大丈夫？

舞台がゆっくり明転する。
舞台の上には、横たわった澤山、それを揺り動かしている慎ちゃん、少し離れて、多川と岡がいる。

澤山　　（目覚めて）あれ？　僕生きてるの？　まじ、生きてるの？・
岡　　喜ぶのはまだ早い。俺たちは電脳空間にいるんだ。戻れなければ、電脳空間でランダムノ

イズとなって消えるだけだ。
佐藤　消えるの・・・
岡　そうだ。消えてなくなる・・・　多川、どうして侵入して来た？
多川　あんた一人じゃ、頼りなくって・・・
岡　二人返すのも自信がないのに、なんでお前まで・・・
多川　助けてやったのに、それはないだろ？　あのままじゃ３人ともノイズになってたところだ・・・
岡　そうだな。お前の言うとおりだ・・・　いいか、みんな。現実に戻るのは、入り込むより難しい。自分の体の中にピンポイントで入り込まねばならないから・・・　だから集中力が必要だ。それと・・・　「お守り」か・・・
佐藤　お守り？
岡　現実に帰るための強い「想い」。それが込められた物。佐藤さん。ポケットの中に何かは入っているか？
佐藤　ポケット？

ポケットをまさぐる佐藤。ふと、何かを発見したようだ。取り出してみると、それは・・・

佐藤　あっ、「ばかうけ」だ。
岡　ムロアジくさや風？
佐藤　そう、そう。これ、岡ちゃんに渡そうと思って・・・　ほら、DVDの例のあれで・・・

と、「ばかうけ」を渡そうとするが、岡は受け取る代わりに・・・

岡　いいかい。今は受け取れない。現実世界で受け取る（ほんとは、今欲しいけど・・・）。佐藤さんは、これを俺に渡すことだけを強く「想う」んだ。心の底から渡したい。これを俺に渡したい。対策室で・・・　いいね？
岡　澤山、おまえは？
澤山　（先ほどから、いろいろなところをまさぐっていたが・・・）ない、何も持ってない。家の鍵すらなくなっている、なんで？
岡　何もソリトナイズされなかったか・・・　仕方ない。（と、背中からカードホルダーを取り出す）これ、欲しかったよな、お前？
澤山　それは、岡ちゃんの大切な五十三次カード・・・
岡　これをお前が持て。
澤山　いいの？　ほんとにいいの？　一枚盗んじゃうかもよ。
岡　向こうついたら返せ。そしたら好きなの一枚やる。
澤山　だったら・・・
岡　（間髪入れず）キラカード以外！　いいか、大切なカード、これはお前にとってとても大切なカードだ。しっかり握りしめろ。いいな？
澤山　うん。
岡　多川？
多川　あたしは持ってる。これ・・・
岡　ロケット？
澤山　何が入ってんの？
多川　（にらんで）言えるか！
岡　握りしめろ。きつく、きつくだ。そして「想え」。

みな目を閉じ、「お守り」を握りしめる・・・
立ち上がる、岡。後方に少女２が現れる。

岡　成功すると思うか？　みな、トーシローばかりだ・・・
少女２　あなたはどう思っているの？
岡　五分五分・・・
少女２　じゃあ、私も五分と五分。
岡　そう言うことか・・・
少女２　そう言うこと。知ってるくせに・・・　重要なのは、信じること。
岡　じゃあ、100%だ。心の底から・・・

少女２と入れ替わるように、舞台後方に大河内が登場。

岡　聞こえるか？　今から全員をそっちへ帰還させる。
大河内　帰還？
岡　そうだ。
大河内　岡君も一緒に・・・
岡　いや、俺は後だ。ここにはまだ、大きなSolitary Packetが残っている。それをどうにかしない限り、この三流ＳＦは終わらない・・・
大河内　岡君も戻りなさい。敵は分かった。攻撃はこちら側からでも出来る・・・
岡　出来ない。ここで決着を付けるしかない・・・
大河内　岡君！
岡　ここから先は、俺一人だ。決して入ってくるな。決して・・・　システムCF2057、全ポート解放。障害なし。レスキューポイント確保。兵士の帰還を要求・・・
大河内　岡君！　いいから戻りなさい！
岡　ハンドシェイク成立。コネクション確立・・・
大河内　岡君！
岡　帰還シークエンス開始。

岡の言葉とともに、舞台が光に満ちていく・・・
高鳴る音響。岡に向けて叫び続ける大河内。
と、唐突に消失する光。
舞台は残像を残し暗転する。

舞台上に立つ、岡。

岡　・・・いるんだろ、Hermit。

舞台後方に現れるHermit。

岡　お前が、最後のSolitary Packetだ・・・
Hermit　そうだな。最後のSolitary Packetか。我々が・・・
岡　我々？

Hermitの後ろから少女１が現れる。

岡　君がどうしてそいつといる？
Hermit　君？
少女１　この人は誰？　この人が邪魔をしたの？
岡　邪魔？

舞台後方に少女２が現れる。

少女２　・・・あなたは、導き、そして、閉じこめた。
少女２を凝視し、そして、少女１に目を転ずる・・・
混乱する岡。

岡　一体・・・
Hermit　君は本当に忘れてしまったのか？　この少女のこと、Faint voiceを・・・
岡　Faint voice？
Hermit　どうして気づかない？　サイ-ソル達を見ておきながら、その原因に思い当たらないのだ？　何が彼らを過去へと弾き飛ばしたのか？　どうして気づかない！
岡　何を言っている・・・
Hermit　思い出せ、おまえ自身を。岡一等通信兵。最強の電脳部隊、Cyber-Force 2049、レッドベレー、のdirect Binder。
岡　・・・・・・
Hermit　Faint voiceに侵入を試みた最初のCyber-Force。（岡が手に持っているHUDを示し）その中に、この時の迷宮の中で、お前が捨て去っていった記憶の残滓を送り込む。それを拾い集め、私はここまで来た。お前の記憶を返してやる・・・
岡　・・・・・・
Hermit　リンクしろ。

HUDをかぶる、岡。

Hermit　それでいい。お前達の部隊はFaint voiceのコアの中で猛烈な反撃を受けていた。量子コンピュータFaint voiceからの容赦ない攻撃だ・・・

と、叩き付けるような音響。あふれ出る光。
光の奥に軍服姿の男、そして瀕死の兵士。Cyber-Force 2049（レッドベレー）の司令官、霧生大尉と小島二等兵である・・・

光の中より、霧生の声。

霧生　dB。撤退は、撤退は不可能か？
岡　・・・・・・
霧生　作戦本部との通信が回復しない状態では、撤退することは出来ないだろう。そうだな、dB？
岡　・・・・・・

兵士　戻れない・・・　もう戻れない・・・
霧生　どうなんだ、dB？　答えろ。
岡　量子コンピュータのコア内部にいる者の追尾は、本部からは出来ない。だから、撤退は・・・
霧生　dB、はっきり言ってくれ。
岡　撤退は・・・不可能。
兵士　そうだよ。もう、戻れない・・・
霧生　（傍らの兵士の肩を優しく叩き、なだめつつ、岡に答える）よく言ってくれた、dB。（ほほえんで）気が楽になった。
岡　大尉。わたしは、わたしは・・・
霧生　dB。撤退できないときは、どうする？　前進するしかない・・・dB、我々の任務は？
岡　霧生大尉・・・
霧生　dB、我々の任務は？
岡　量子コンピュータFaint voiceの破壊。Faint voiceは、その「か細き声」は、世界を破壊する・・・　いや、そうではなかった・・・

霧生らへの照明が消え、代わりにHermitに明かり。

Hermit　コアに侵入した時点で分かったはずだ。Faint voiceが破壊するわけではない。それは、「通信装置」に過ぎなかったと・・・　昔、太陽系の外を探索するという目的で、一機の探査機が衛星軌道上から飛び立った。その探査機はある恒星を一直線に目指していた。そう、シリウスだ。
岡　当時シリウスは奇妙な挙動を示し始めていた。学者の中にはシリウスの爆発を危惧する者も少なからず現れて・・・
Hermit　探査機にはひとつの「生体部品」が組み込まれていた。ひとりの少女だった。人工的に作られた受精卵を分割し、それらを量子的に「絡み合い」の状態にして、超光速通信の核とする。
岡　「双子のシンクロニシティ」・・・　一卵性双生児の間にはテレパシーのようなものが存在していて、距離に関係なく、その情報は瞬時に伝達される。例え何光

年離れていようと・・・　情報伝達が光の速度を超える。常識に反しているようだが、人間の「意識」が量子力学的な作用であること、そして、その双子が量子的に絡み合っていることに基づいて考えれば・・・

Hermit　シリウスが爆散し、強力な電磁波が津波のように地球を襲う。その津波を前もって知らせるためには、光の速度を超える情報通信が必要だった。それが双子だったというわけだ。そして、その警鐘システムの名称が・・・

岡　Faint voice、か細き声・・・

照明振り変わって、後方の少女達にサス。

少女１　誰も期待していなかった・・・

少女２　誰も信じていなかった・・・

少女１　私たちのタスクを。

少女２　私たちは通じ合っていた。

少女１　同時に共有できていた。

少女２　イメージを、感覚を、そして互いの意識までも・・・

少女１　でも、誰も・・・

少女２　誰ひとりとして信じていなかった。

少女１　歩くための足も、掴むための手もなく。脈打つ心臓も電気仕掛けのポンプに置き換えられ・・・

少女２　呼吸するための胸もなく、涙する目もなく、量子コンピュータと様々な電子デバイスに接続された生体部品、灰色の神経繊維の塊として・・・

少女１　研究所の地下深くに、

少女２　宇宙の彼方の宇宙船に、

少女１　つなぎ止められ、

少女２　閉じこめられていた。

少女１　人類の滅亡を未然に防ぐための警鐘を鳴らすために、

少女２　光よりも速く、警告を伝えるために、

少女１　それだけのために存在していた・・・

少女２　ある日、私は小さな窓の向こうに光を見た。シリウスが輝いていたあたりから、圧倒的な光の洪水がこちらに向けて迫ってきているのを・・・

少女１　ある日、私は不意に自覚する。遙か彼方の私が消滅したのを・・・　私は叫んだ。私が、遙か彼方の私が、消滅した！　何度も、何度も、私は叫んだ。もし、肉で出来た喉を持っていたなら、きっと張り裂けて、二度と使い物にならなくなるほどの大きな声で・・・

少女２　その時が来たんだ。私は私自身の「意識」をパラボラから地球に向け発信した。これでやっと、地球に帰ることが出来る。残してきた私自身に戻ることが出来る。私は光の速度に加速する。私の背後で、宇宙船は私の脳細胞とともに目映いばかりの光に包まれ、瞬間的に融解し消失する。

少女１　「私が、遙か彼方の私が、消滅した！」そう叫ぶ私を、研究者達は黙殺した。「私は光を見た。きっと、これは警告！」なおもそう叫び続ける私の傍らで、量子コンピュータが突如動き出す。私の情動を、私の驚愕を、解析しようでもするかのように、量子ゲートが狂ったように稼働し始め・・・　それを見て、慌てふためく研究者達。私のことなんかそっちのけで・・・　ちょっと待って！　環流している血液の中に大量の鎮静剤が打ち込まれた・・・　私は動き出したばかりの量子コンピュータに自らの「意識」を忍び込ませる・・・

少女２　暗黒の空間が虹色の淡い光で満ちていく・・・　宇宙空間を光の速度で飛ぶ私は、そして時間の感覚を失う・・・
少女１　時が幾重にも分散し、重なり合っていく・・・　量子コンピュータのコアに侵入した私は、そして時間の多元性を知る・・・

少女達が消える。

岡　世界を破壊するのは、Faint voiceではない・・・
Hermit　そうだ。それは、単なる「通信装置」。しかし、それは世界の終わりを伝えた「予言装置」でもあった。
岡　予言などしていない。断じて・・・　Faint voiceは探査機が消滅したと告げただけだ。
Hermit　しかし、彼女は叫んだだろう。「光を見た」と・・・
岡　その光が、シリウスの超新星爆発かどうかは分からないだろう！　探査機からの最後の通信が届くまでは誰にも分からない・・・　それに！
Hermit　それに・・・　なんだ？

霧生と兵士が現れる。

霧生　いいか、dB。その超新星爆発は予言されただけのもの。私は、量子コンピュータに接続された生体部品の錯乱である可能性が高いと思っている・・・　だが、その生体部品は、「８年と７ヶ月後の世界の終焉」を、心の底から信じ切っている。もう一方の自分、が消滅したことにより、自らも消滅すべきだと考えているんだ。Faint voiceは、もう一方の自分からの「最後の通信」を待っている。自らの消滅は、その「最後の通信」の到来と同時でなければならない。それが本来の意味での「同時刻」・・・
岡　因果律がほころび始めていると言うのに、いまさら「同時刻」だなんて・・・
霧生　因果律がほころび始めているからこそ、あえて同時刻でなければならない。その時を待っているとしか思えない・・・　だからこそ、量子コンピュータのコアに閉じこもったFaint voiceは、すべての攻撃に対し反撃している・・・
岡　すべての攻撃？
霧生　そうだ。我々の攻撃が、初めてではない・・・　様々な物理破壊が試された。
岡　でもそんな事実は・・・
霧生　情報自体がどんどん消え去っていっている。
岡　Faint voiceが軍事データベースに侵入？
霧生　いや、もっと違った方法で。情報が消え去るのは、データベース上だけではなく、我々の頭の中からもだからだ・・・
岡　我々の記憶から？
霧生　Faint voiceは時を操れる・・・　あった過去を、なかったことに出来るんだ。量子コンピュータという平行世界の中に存在しているために・・・
岡　そんなばかな！
霧生　いいか。問題は光の速度を超えた通信が行われてしまったことなんだ。そして、現在と未来と過去が混線し始めた・・・
岡　じゃあ、Faint voiceは・・・
霧生　過去を操り、そして未来まで変えることが可能だ。Faint voiceが望めば、本当は

爆発していないシリウスを爆発させることまで可能なのかもしれない。
岡　つまり、「最後の通信」を受け取った時点で、世界を終わらせることも出来る・・・
霧生　dB。それを阻止するんだ。「最後の通信」をFaint voiceに届けてはならない・・・
岡　大尉、どうやって？
霧生　通信回線を切断し、交信できないようにするんだ。
岡　でも、Faint voiceは時を操ることが出来る・・・
霧生　ならば、お前も操ればいい。
岡　？
霧生　dBになら出来るだろう？　私には出来ないが、お前なら出来る。（ふと傍らの兵士を見て）dB。小島がもう持ちこたえられそうにない。こいつの情報が、ノイズに還元される前に受け取れ。戦うためのエナジー・ソースとして使え。
岡　なにを言っているんですか！
霧生　我々はもう戻れない。だから・・・

霧生、銃を引き抜き、自らのこめかみに向ける。

岡　大尉、何をする気ですか？
霧生　我々の持っているすべての情報を受け取れ。そして、それを還元しながら、Faint voiceと渡り合え。
岡　大尉！
霧生　世界を救え。頼んだぞ、岡一等通信兵！

銃声。岡のみのサスとなる。

岡　・・・大尉の記憶が、小島の記憶が、大量に流れ込んでくる。あまりのことに目眩を感じて、倒れ込みそうになる。だが、彼らの「想い」がそれを許さない。通信回線を切断するのだ。自分の記憶の一部をランダムノイズに還元ながら、通信ルートを探る。引き裂かれるような痛み。だが、レーダーコントロールに到達できた。ハックし、ダイレクトに自分自身につなぐ。

舞台後方に立っている少女１に明かり。それに気付く、岡。

少女１　・・・あなたは誰？
岡　きみは？　どこから来た？
少女１　わたしはずっとここにいた・・・
岡　ここに・・・
少女１　通信が切れた・・・　消失したから？　でも、何の前触れもなく・・・　ねえ、何か知らない？
岡　通信？
少女１　シリウスからの・・・
岡　シリウス・・・　Faint voice？
少女１　知らない、そんな名前・・・
岡　（拳銃を向け、叫ぶ）Faint voiceだな。我々はお前を破壊しに来た。
少女１　銃をおろして。私は破壊コードでは死にはしないから・・・
岡　動くな。いいか、レーダーコントロールをハックした。瞬時にそのハードウエア

に破壊コードを送り込むことだって出来る・・・
少女１　したいのならすればいい。直るから、全部元通りに・・・　あなたが、来なかったことにすればいいの・・・
岡　・・・・・・
少女１　あなたに私を殺すことは出来ない。私は死なないの、まだ・・・

岡　撃ったところで、殺せないのは分かっている。撃った破壊コードが、逆に自分自身に向かって飛んでくるイメージまでも浮かんでくる。そう、過去が書き換えられる・・・（ふと、気づき）「最後の通信」・・・　待て、回線の破壊ではなく、「最後の通信」自体を破壊すれば・・・　この回線に乗り、シリウスへ向かって・・・通信パケットを破壊するだけなら・・・
少女１　何をしてもだめ。未来は変わらない・・・
岡　未来のことは、誰にも分からない。それが未来だ・・・　そうだろう？

低く呻いて、引き金を引く岡。こだまする銃声。あふれる光。そして、消え去る少女１。
舞台の上で岡だけが浮かび上がっている。

岡　・・・撃ち放った破壊コードの銃弾が、まるで鏡に反射したかのように、こちらに向かって飛んでくる。きびすを返し、通信回線へ飛び込む。レーダーサイトへ向かって加速。託された霧生大尉の、小島の記憶情報をノイズに還元しながら、宇宙に向かい一直線に飛ぶ。破壊コードもまた、電波に置き換えられ、後を追いかけてくる。これでいい。これから先は１本道だ。この先に「最後の通信」がある・・・

舞台後方に現れる大河内と吉谷、そして佐藤。

大河内　岡君の話しているのは、一体だれ？　あの軍服の男は・・・
吉谷　・・・・・・
大河内　いったい何の話をしているの？
吉谷　シリウス超新星爆発って・・・
佐藤　っていうか、何見てるわけ、僕ら、今・・・

振り変わって、岡とHermitにサス。
大河内ら、消える。
HUDを地面に落とす、岡。放心したように立ちつくしている。
傍らにHermitが立っている。

Hermit　教えてくれないか・・・　宇宙空間に飛び出し、ノイズに還元されるはずだった君がどうしてここにいるのだ？　君は確かに望み通りに衝突した。「最後の通信」であるFaint voiceの一方の「意識」と君自身。ついで「破壊コード」の三重衝突だ。だが、もう一つそれにぶつかったものがあるのではないか？
岡　・・・・・・
Hermit　シリウスからの洪水のような光だ。それが本来ならノイズになるはずの君という

データを過去へとはじき飛ばした。違うか？
岡　・・・・・・
Hermit　その膨大なエネルギーが、君と少女を過去へ運んだのではないのか？　だから、彼ら、Cyber-Force2057もここへと飛ばされて来ることになった。君によって、すでに通路が作られていたからだ。
岡　彼らもシリウスからの膨大なエネルギーによって・・・
Hermit　そうだ。
岡　じゃあ、地球は？
Hermit　未来は救われたと思っているか？

後方に現れる。澤山と多川、そして松田。

澤山　やがて世界は焼き尽くされる・・・　それって・・・
多川　シリウス・・・　世界の終わり。
澤山　Solitary Packetは、サイ-ソル達は、そのエネルギーによって過去に飛ばされてきた？
松田　そんなのって・・・
多川　時のゆらぎだ。量子コンピュータ内部の重なり合った時間がそれを可能とした・・・

澤山らの照明が落ち、舞台から消える。
ゆっくりと首を横に振る、Hermit。

Hermit　未来は救われてなどいない。
岡　Hermit・・・　お前は一体？
Hermit　（質問には答えず）私はすべてを収束させるためにここへやってきた。彼女とともに・・・

歩み出る少女１。

岡　Faint voice・・・
Hermit　彼女に「最後の通信」を伝えるために・・・　かくして「混乱した時間」が収束する。岡、Faint voiceの一方は、もうひとりはどこにいる？
岡　どこにもいない。破壊した。
Hermit　嘘をつくな。お前は彼女とともにここへ来た。

岡が銃口を自分自身のこめかみにあてる。
舞台後方に躍り出る大河内。それを押さえようとする吉谷と佐藤。

大河内　岡君。何をする気！　やめなさい！岡君。聞こえてるの！　ねえ聞こえてるの！　彩、レーザースキャンのプロセスシークエンスを！　お願い！
Hermit　何をする気だ？
岡　彼女は俺の存在情報とともにハイブリッド化して存在している。もう、分離は不可能だ。俺が死ねば、「最後の通信」も一緒に滅びる。
Hermit　そんなことをしても、未来は変わらない。

岡　　未来は決まってはいない。だから・・・
Hermit　お前ひとりが、どんなにもがこうが、未来は変わらない。
岡　　・・・あの時、宇宙空間でFaint voiceに出会ったその時、俺は確かに光を見た。膨大な量の光を見た。咄嗟にFaint voiceの「意識」を、破壊するはずだったその意識を抱きしめた。強烈なエネルギーは、破壊するどころか、俺たちを加速し、過去へと突き飛ばした。飛ばされながら、少女と自分の情報が混じり合っていくのが分かる・・・　俺は彼女の意識を残そうとした。実体化。誰かの存在を消し去る代わりに、自分自身をそこに置く・・・　自分自身の記憶の大半をノイズに還元しながら・・・彼女は俺とともにいる。記憶を失った俺自身の中に・・・

少女２が明かりの中に歩み出る。

岡　　あの時、なぜ君を助けようと思ったんだろうか？　それは、霧生大尉の言葉を思い出したからだ。「Faint voiceが望めば、本当は爆発していないシリウスを爆発させることまで可能なのかもしれない。」・・・逆に考えれば、「Faint voiceが望めば、本当は爆発してしまったシリウスを爆発させないことも可能だ」と言うことだろう？
Hermit　あり得ない・・・
岡　　おれは、宇宙で膨大な量の光を見たが、だが、お前と違って、達観などしなかった！　決して、あきらめようとは思わなかった！　通信回路を切断し未来を変えようとした。過去に出現することによって未来を変えようとした。そして、今、消え去ることによって未来を変えようとしている。こんな小さな書き換えでは世界の終わりを回避することなど出来ないかもしれない・・・　でも！
少女２　私はあなたと一緒に消滅するの？
岡　　俺たちは分離不可能だ・・・　なあ、何年か前、君はシリウスのすぐ近くに見えるM41星団の話をしてくれた。大学の屋上からそれを見つけることは出来なかったけど・・・　今、思い出したよ。宇宙で君に向かって飛んでいく時に確かにそれを見た。オレンジ色に輝く星々の群れ。
少女２　2000光年以上も彼方の・・・
岡　　そう。遙か彼方の・・・
少女２　私は小さな窓からそれを眺めるのが好きだった・・・
岡　　あの時、君は光を見たのか？　本当にシリウスからの光を見たのか？　本当に世界は終わってしまうのか？　それを本当に望んでいるのか？　Faint voiceが望めば、未来は変わるんじゃないのか？　時を操れる君たちなら・・・
Hermit　（諭すように）岡、未来は、もう決定している。
岡　　未来は変わるから、未来なんだろう。「最後の通信」そんなものは、端から、存在していなかった・・・　シリウスは爆発していなかった。だから、君は今でも飛び続けている・・・　シリウスの脇を亜光速ですり抜け、遙か彼方の、美しくオレンジ色に瞬く、あの星団に向かって・・・　そうだろう？

引き金にかかった岡の指に力が入る。目を閉じる少女２。手をのばすと震える岡の指先に触れる。握りしめようとする・・・
少女１がHermitを押し退け、前に歩み出る。前方を見つめ、前に腕を延ばす・・・
達観したように立ちつくすHermit。
押さえつけられていた大河内が、叫ぶ。

大河内　岡君！

木霊する銃声。あふれる光。高鳴る音響。
そして、不意に光と音が途切れ・・・
大河内へ一本のサス。

大河内　私は聞いた。「かちり」と音を立てて「時」が平行移動したのを・・・　シリウスの爆発しない未来に向けポイントが切り替わった音を。私は、その時、確かに聞いたんだ・・・

と、叩き付けるような音響。
炸裂する後方からの目もくらむばかりの照明。
頭を打ち抜いた岡。
目を閉じて岡の手を握りしめる少女２。
達観したように立ち尽くすHermit。
そして、前方に手を突き出したままの少女１。
静止画。止まった時間。それを浮かび上がらせる。

そして、暗転。何事もなかったかのように、舞台が静まりかえる・・・

021　Ending　［エンディング］

Solitary Packet対策チームの面々がいる。そこに岡の姿はない。あたかも「端っから存在していなかった」とでも言うように・・・

大河内　・・・Solitary Packetは光ソリトンネットワークから消え去った。私たちのチームが発案した「ホログラム・三次元メモリーへのノイズの吸い出し」が功を奏したのだ。もはや、ネットワーク中には通信の障害となるノイズは存在しない。光ソリトン通信サービスはSOCOM社の目論み通り、２ヶ月後開始されるだろう。1 T bits/secという驚くべき通信速度で・・・　予定通りに、すべてが解決し・・・　そして、Solitary Packet対策チームは今日限りで解散となる。慎ちゃんはその功績を認められ、SOCOM社、開発部の研究員になることになっていて、そして彩はセキュリティ部門での職を得た。紗英はコンピュータ業務部の正規職員になる。松田さんも、寿退社で秘書を失った営業部の部長から「是非とも雇いたい」という打診を受けている。彼女は即答を避けたようだが、部長の強引さに負けて、２週間の休暇の後、秘書の椅子に座ることになりそうだ。みんながみんな、丸く収まって・・・

舞台袖に、ハッピー・ケータリング・サービスの佐藤が登場。段ボールを抱えてにこにこしている。

多川　来てるよ。

松田、それに気づき、入り口に駆けていく。スライドするドア。

佐藤　（ずけずけ入り込んで）ハッピー・ケータリング・サービスです。
松田　佐藤さん。ケイタリングは先週でお終いって・・・
佐藤　今日は、私の奢り。だって、今日でお終いなんでしょ、この対策室は？
松田　ええ、そうなんですけど・・・
佐藤　お祝い、そんな感じです。
松田　でも、あの・・・
大河内　いいじゃない。お別れ会前哨戦ということで、ご厚意に甘えましょう。
佐藤　あっ、大河内さん。お疲れ様でした。
大河内　ありがとう。
佐藤　どこに移られるんですか？
大河内　小さな情報通信会社。弱小だから名前言ったって分からないでしょ・・・
佐藤　また、ヘッドハンティングってやつですか？
大河内　まあ、そういうもんかな・・・（ひとりごちて）嘘だった。次の職など決まっていない。私はただ辞めるだけだ。SOCOM社は引き留めようとした。しかし、私はその申し出を断り続けた・・・　なにか、不快な歯車のずれを感じていたからだ。ここの仲間達や会社に対してではなく、自分自身に・・・　心のどこかが軋んでいる・・・
佐藤　松田さん。今日は日本茶じゃなく紅茶の方がいいかも。なんたって、ブルボン・東日本食品、スイート系でエレガントにキメてみました。
吉谷　ブルボン？
佐藤　吉谷さん、今、触手動いちゃいましたね？　そうです、本日はブルボン・トラディショナ

ル６（シックス）と呼ばれる、ホワイトロリータ、ルマンド、ルーベラ、バームロール、チョコリエール、そんでもってレーズンサンドって布陣です。
多川　「トラディショナル６」？　ホントにそんな言い方するのか？
佐藤　気にくわないなら「ノーブル６」とか「ファンシー６」でも結構。
松田　自信を持って言い切っている割に、いい加減なのね・・・
多川　エリーゼ入れて、「なんとか７」にした方が、語呂よくない？
佐藤　さすが、多川さん、ナイスなご意見と申し上げたいところですが、エリーゼはブルボンにおいてはＢ級菓子です。ホワイトロリータやルマンドと同列に並べるわけにはいきません。
多川　そう言や、麩の中にチョコ入れただけだもんな・・・
佐藤　ザッツ・ライト！　あれ？　今になって気づいたんですけど、多川さんそのロケット、いけてますね！
多川　褒めたって茶もでねえよ、佐藤。
佐藤　何入ってるんですか？
澤山　彼氏の写真とか？
多川　あのなあ、お前。こん中には・・・あれ、なんだったっけ？（開けて）あれ、おみくじだ。
澤山　おみくじ？
佐藤　（それを開き、愕然とする）こ、これは・・・　大凶！
多川　そーだ、そーだ。去年の初詣で引き当てたんだった。すげーだろう？
吉谷　（駆け寄り、佐藤から受け取る）初めて見た。
松田　（同様に駆け寄り）っていうか、かなりレア・・・
多川　だろう。ねらって引き当てられるものじゃないぜ！　とんだラッキーアイテムってところだ！
澤山　ラッキーアイテムなの？
三人　（力強く、うなずく）
佐藤　あ、そうそう。皆さん。今日はブルボンだけではなく、同じく新潟の栗山米菓の「ばかうけ」の新味を持ってきたんですよ。今度はなんと「テビチー風味」。お待ちかねの豚足味ですね。がつんと来ますよ。これを是非とも味わっていただきたくて、「ばかうけ」フリークの・・・　あれ、誰でしたっけ？　いましたよね、無類の「ばかうけ」フリークが・・・

みんなの顔を見渡す佐藤。でも、全員がきょとんとしている。

佐藤　あらら、勘違いでしたね。ははは・・・
松田　じゃ、今日はブルボン今日は「トラディショナル６」ってことで、紅茶にしますね。で、紅茶がダメなのは・・・

みんなの顔を見渡す松田。でも、全員がきょとんとしている。

松田　あっ、そうそう。全員紅茶大丈夫だったんですよね。では、すぐいれてきます・・・
澤山　（ダンボールを探っていたが）・・・佐藤さん。テキサスコーンは？
佐藤　あっ、カード集めてましたよね。名古屋名物カード。あれ、製造中止！
澤山　うぞ！　出てから３週間も経ってないし・・・
佐藤　生き馬の目を抜く、このご時世、３週間でも保った方です。ここだけの話、人気なかったみたいです。
全員　やっぱり。
澤山　全く最近の駄菓子屋は気骨がねーなぁ。すこしは、永谷園を見習えちゅうの！（と、カー

ドホルダーを取り出す）
佐藤　こっ、これは！　東海道五十三次カード！
澤山　全部で５５種類。フルコンプリートだ。
佐藤　マジ、マジ。すげえ！　あっ、蒲原の雪景色のキラカードだ！
澤山　これ手に入れたときは、ホント嬉しかったなぁ、たしか、これは・・・　たしか・・・

全員ストップモーション。凍り付いた舞台。大河内にサス・・・

大河内　・・・心のどこかが疼いている。ぽっかりと穴が空いて、疼いている。ここには確かにもう一人いた。そんな気がして仕方がない。でも、思い出すことが出来ない。思い出そうとすることを、頭脳が拒絶する・・・　歯の抜けた穴を周りの歯茎が盛り上がり埋めていくように、心の隙間が埋められていく・・・　違和感が違和感でなくなっていく・・・　ねえ、これが時の可塑性？　時間がすべてを埋め尽くし、やがて、私はすべてを忘れて去ってしまうだろう・・・　（ふと怪訝な表情になり・・・）やがて・・・　やがて？

大河内は､なにかを思い出したのだ｡時の平行移動により失われてしまったある記憶を･･･揺らぎの中で、曖昧に、だが、確実に知覚し始める。
突如、舞台後方に少女達が出現する。

大河内　やがて！
少女達　やがて世界は焼き尽くされる・・・

叩き付けるように音響が響き渡り、音の洪水が劇場を満たす。

と、舞台後方に一人の男が立っている。
岡である。岡は戦闘服を着ている。Cyber-Force2049レッドベレー。ヘルメットや腕に緋色のリボンが巻き付いていて・・・　解れたリボンの先端が風にたなびいて・・・
大河内がその姿に気付く。
真摯になにかを見つめている岡一等通信兵。愁いを含んだその表情。
それを見つめる大河内の唇が微かに動く・・・

「岡君・・・」

その声は、大音響の中、誰にも届くことはない。
岡は遠くを、見つめ続けている。大河内の唇が、また微かに動く・・・

「未来は・・・」

立ちつくす大河内。そして。凍り付いた舞台上の俳優たち。
その輪郭を溢れんばかりの光が薙いで・・・　そして、ゆっくりと、暗転していく・・・

未来は、本当に変わったのだろうか・・・

天狼新星　第一章　交雑機関　［修復版］　（了）